

今山遺跡第6次調査

- 重要遺跡確認調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1254集

2015

福岡市教育委員会

今山遺跡第6次調査

-重要遺跡確認調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1254集

平成27年3月25日

福岡市教育委員会

序 文

福岡市は、古代から大陸の門戸として発展を遂げており、多くの歴史的遺産を有しています。また、アジア、特に中国・朝鮮半島との対外交渉の接点として我が国の中でも大きな役割を担ってきました。

今山遺跡の所在する今山は、博多湾岸の西部に位置し、古代から中世における日宋交易で栄えた今津湾の右岸に存在します。この今山が所在する今宿横浜地域は、「魏志倭人伝」においては「伊都国」に所属し、文化交流の要として特に弥生時代から古墳時代の重要な遺跡が存在する地域でもあります。

今山遺跡は、朝鮮半島南部を経由してもたらされた稻作文化を特色とする弥生時代の磨製石斧を製作した遺跡として全国的にも稀有な存在です。この遺跡の発見は、大正12年に九州帝国大学医学部教授の中山平次郎博士の踏査・研究によるもので、石斧製作跡及び石斧製作工程を明らかにされた事が、弥生時代の石器製作と流通に関する研究が進展する契機となったといえます。

今山遺跡では、從来から地域住民によって石斧等の遺物が採集、保存されてきましたが、福岡市教育委員会は、昭和43年から今山周辺において確認調査等の発掘調査を行い、今山遺跡の実像を調べて來たところです。

昭和48年に今山北西地域において大規模宅地造成工事が計画されたため遺跡の重要性を鑑みて文化庁と協議の上、重要遺跡確認調査として今山遺跡第6次調査を実施したものです。

福岡市教育委員会では、この今山遺跡第6次調査の成果をまとめ、報告書を作成致しました。本書が、市民をはじめ多くの方々が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会
教育長　酒井龍一

例　　言

- (1) 本書は、今山遺跡の国史跡指定に際して福岡市教育委員会が国庫補助金を得て昭和59年度に実施した今山遺跡重要遺跡確認調査の報告書である。
- (2) 本書には、今山遺跡第6次調査の遺跡範囲確認調査の成果について収録するものである。
- (3) 重要遺跡確認調査は、福岡市教育委員会（旧）文化課埋蔵文化財調査係の井澤洋一・米倉秀紀が担当した。
- (4) 本書に掲載した遺構の平面断面図及び土層図については井澤、米倉、谷澤仁、宮田昌之、九州大学考古学研究室の学生が担当した。
- (5) 本書に掲載した遺物の実測図は、井澤が主として行い、石斧未製品の一部は外部委託した。拓本は長野千重が担当した。
- (6) 本書に掲載した遺構・遺物の製図は、主として井澤が行い、一部の製図は外部委託した。
- (7) 遺構・遺物写真撮影は、井澤が担当した。
- (8) 本書に用いた航空写真等については、福岡市埋蔵文化財センターにご提供いただいた。
- (9) 本書に用いた方位は、磁北である。
- (10) 報告書にかかる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する予定である。
- (11) 本書の編集・執筆は井澤が担当した。

遺跡調査番号	8409	遺跡略号	IMY
地　　番	福岡市西区今山	分布地図記号	今山119
調査対象面積	117,900m ²	調査面積	340m ²
調　　査　　期　　間	昭和59年10月8日～昭和59年11月30日		

本文 目 次

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 発掘調査の組織.....	1
(1) 昭和 59 年度の発掘調査組織	1
(2) 平成 26 年度の資料整理組織	1
第2章 今山遺跡の歴史的環境.....	3
1. 立地.....	3
2. 歴史的環境.....	4
第3章 今山遺跡第6次調査報告.....	9
1. 調査方法と概要.....	9
2. 各調査地点の遺構と遺物.....	11
(1) 第1地点.....	11
(2) 第2地点.....	13
(3) 第3地点.....	16
(4) 第4地点.....	25
(5) 第5地点.....	26
(6) 第6地点.....	32
(7) 第7地点.....	37
(8) 第8地点.....	38
(9) 第9地点.....	39
(10) 第10地点	40
(11) 第11地点	46
(12) 分布調査.....	47
第4章 今山遺跡採集遺物.....	48
(1) 大内土郎氏採集遺物.....	48
(2) 上原勇夫氏採集遺物.....	48
(3) 西南高等学校収蔵遺物.....	48
(4) 玄洋中学校収蔵遺物.....	48
第5章 まとめ.....	53

挿 図 目 次

Fig. 1 「筑前名所圖繪卷の十」 標 原之図（文政四年 1821 年）	2
Fig. 2 今山遺跡周辺の遺跡（縮尺 1/100,000）	3
Fig. 3 今山遺跡位置図（縮尺 1/25,000）	5
Fig. 4 今山遺跡調査地点位置図（縮尺 1/4,000）	6
Fig. 5 今山測量図（縮尺 1/2,500）	7
Fig. 6 調査地点及び分布図（縮尺 1/2,000）	10
Fig. 7 第1地点位置図及びトレンチ平面図・土層図（縮尺 1/300、1/80）	12
Fig. 8 第2地点位置図及びトレンチ平面図・土層図（縮尺 1/300、1/60）	13

Fig. 9 第2地点出土遺物 1 (縮尺1/3).....	14
Fig.10 第2地点出土遺物 2 (縮尺1/4).....	15
Fig.11 第3地点調査位置図 (縮尺1/300).....	16
Fig.12 第3地点トレンチ拡張区平面・断面図 (縮尺1/60)	17
Fig.13 第3地点トレンチ北壁土層図・石斧未製品分布図 (縮尺1/80)	18
Fig.14 第3地点拡張区平面図・断面図 (縮尺1/40)	19
Fig.15 第3地点出土遺物 1 (縮尺1/4).....	21
Fig.16 第3地点出土遺物 2 (縮尺1/4).....	22
Fig.17 第3地点出土遺物 3 (縮尺1/4).....	23
Fig.18 第3地点出土遺物 4 (縮尺1/3, 1/4)	24
Fig.19 第4地点調査位置図 (縮尺1/300).....	25
Fig.20 第5地点トレンチ位置図 (縮尺1/200).....	27
Fig.21 第5地点第1トレンチ平面・断面図 (縮尺1/40)	28
Fig.22 第5地点第1・2トレンチ平面図・土層図 (縮尺1/40)	29
Fig.23 第5地点出土遺物 (縮尺1/4).....	31
Fig.24 第6・9地点位置図 (縮尺1/300).....	33
Fig.25 第6地点グリッド平面・土層図 (縮尺1/40)	34
Fig.26 第6地点出土遺物 (縮尺1/3, 1/4)	36
Fig.27 第7地点位置図 (縮尺1/500).....	37
Fig.28 第8地点位置図 (縮尺1/500).....	38
Fig.29 第9地点グリッド平断面及び土層図 (縮尺1/40)	39
Fig.30 第9地点出土遺物 (縮尺1/3).....	39
Fig.31 第10地点調査位置図 (縮尺1/300)	40
Fig.32 第10地点第2トレンチ平面・断面図 (縮尺1/40)	42
Fig.33 第10地点出土遺物 1 (縮尺1/4)	43
Fig.34 第10地点出土遺物 2 (縮尺1/4)	44
Fig.35 第10地点出土遺物 3 (縮尺1/4)	45
Fig.36 第11地点グリッド位置図 (縮尺1/500)	46
Fig.37 第11地点グリッド平面図及び土層図 (縮尺1/40)	47
Fig.38 分布調査表採遺物 1 (縮尺1/4).....	48
Fig.39 分布調査表採遺物 2 (縮尺1/4).....	49
Fig.40 分布調査表採遺物 3 (縮尺1/4).....	50
Fig.41 参考表採遺物 1 (縮尺1/4).....	51
Fig.42 参考表採遺物 2 (縮尺1/4).....	52

表 目 次

Tab. 1 今山遺跡調査一覧	54
-----------------------	----

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市の西北部に位置する今山を、弥生時代の石斧製作遺跡として全国に知らしめたのは、九州帝國大学に在籍されていた中山平次郎博士で、博士は大正12年に現地踏査されて、石斧製作跡の推定と共に石斧製作工程についても明らかにされた。昭和43年の福岡市教育委員会の第1次発掘調査を始めとして研究者によって今山遺跡出土の今山型石斧未製品の製作工程、流通、時期等の様々な研究がおこなわれてきたが、今山遺跡自体の本格的な発掘調査が部分的なものであったため、実態が不明のまま今日に至っている。

今山の現状では、中山平次郎博士を含む各研究者が石斧製作跡と推定した熊野神社及び白髭神社周辺を含む今山そのものについては全く発掘調査が行われていなかった。今山の西部地域は、玄洋中学校校庭の埋め立て整備のため採土や、旧日本軍の防空壕、弾薬庫などの掘削等によって地形改変を受け、一部には土砂崩壊を伴う危険箇所が存在し、防災措置が取られている。

今回の発掘調査の経緯は、北九州市所在の開発会社により今山西側を宅地造成する計画が申請されたため、今山遺跡の保護保存を行うに当たって、遺跡の範囲及び構造・遺物の分布実態、及び防災工事地域の把握を目的として急速、緊急調査を実施したものである。発掘調査に当たっては、宅地造成区域に限らず、今山遺跡の全体像を把握するための遺跡範囲確認に重点を置いてトレントを設定し、弥生時代石斧製作跡、製作時期、製作工程の把握に努めた。

分布調査及び発掘調査は、昭和59年10月8日～平成59年11月30日まで実施した。

2. 発掘調査の組織

(1) 昭和59年度の発掘調査組織

調査主体 福岡市教育委員会
調査責任 福岡市教育委員会文化部文化課長 生田征生
発掘担当 埋蔵文化財第2係長 折尾学 担当 井澤洋一、米倉秀紀
庶務担当 文化係 岡嶋洋一
調査補助員 谷澤仁、宮田昌之
調査協力者 座親秀文、合星龍介、高浜謙一、西原達也、吉村哲美、蜂須賀六三、有富いつ子、石田スエ子、板尾サツキ、諸方マサヨ、金子由利子、清原ユリ子、後藤ミサヲ、坂口フミ子、柴田勝子、庄野崎ヒデ子、西尾たつよ、平井和子、中村千里、松下節子、松尾玲子、宮原邦江、森田ミツエ、森田久子、吉田鶴子
九州大学考古学研究室 田崎博之（当時助手）、池田祐司、大曾善晃、岩本陽児、溝口孝司、山田元樹、土井基司、渡辺芳郎、久保寿一郎、
整理作業 藤森直美

(2) 平成26年度の資料整理組織

整理報告総括 福岡市経済観光文化局文化財部文化財調査課長 常松幹夫
庶務担当 調査第1係長 吉竹学、第2係長 榎本義嗣
整理報告担当 埋蔵文化財専門員（嘱託）井澤洋一、整理作業員 長野千重



今山航空写真（昭和 59 年撮影）東から

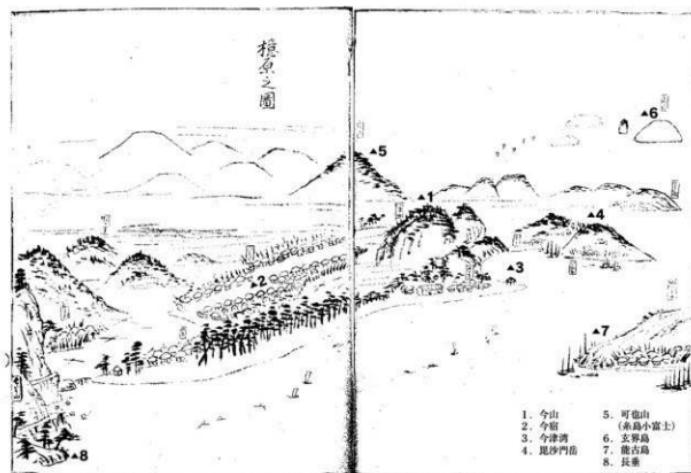


Fig. 1 「筑前名所国絵巻の十 檜原之図」(文政四年 1821 年)

第2章 今山遺跡の歴史的環境

1. 立地

今山は、福岡市西北部の糸島平野を流れる瑞梅寺川河口の東側に位置し、第三紀の花崗岩及びその上部を覆う玄武岩から成る標高約82m、南北長550m、東西長300mを測る独立した小山であるが、鷲川河口に発達した今宿砂州で長垂の山稜部と結ばれており、この砂丘上には今山遺跡と同時代の遺跡・構造が存在する。

今山の北側半分は既に宅地造成されており、また、今山東側の県道志摩線側は急峻な崖面を形成しているため県の防災地区に指定されている。今山の玄武岩は、流理構造、柱状節理が発達しているといわれ、現在の山頂部には玄武岩露頭に見ることができる。大正時代に始められた福岡県の碎石事業

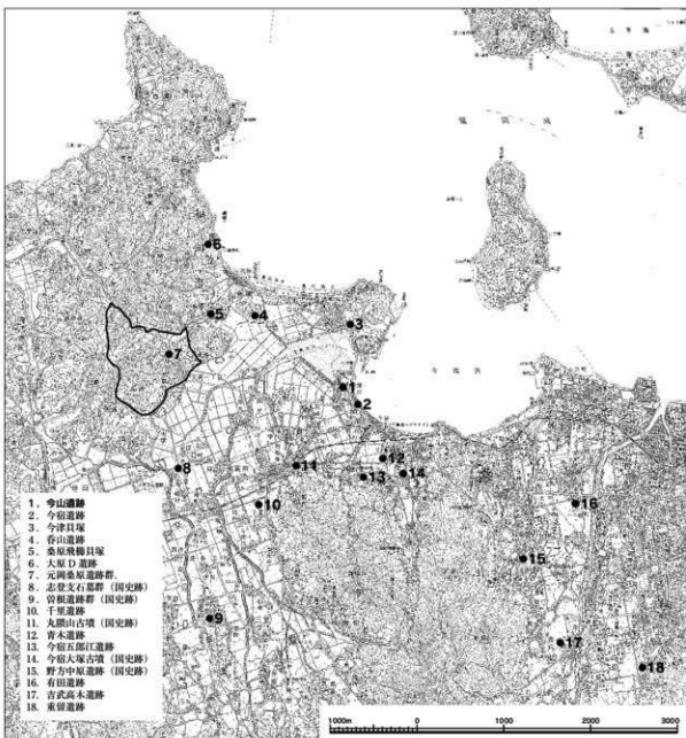


Fig. 2 今山遺跡周辺の遺跡（縮尺1/100,000）

のため山頂上にあった玄武岩露頭が、大きく削られて山の高さを減じた。戦時中は板付飛行場建設の路盤工事の用材として盛んに採掘されたと地元に伝わっている。今山を遠方から見ると頂上が二つの峯に分かれているように見えるのは、石材採掘のため山頂部が窪んだためである。今山の汀線全体は、明らかではないが、今山遺跡第3次調査によって今山海岸部汀線に沿って玄武岩の転石が集積していることが確認されている。また、山内においては、西側及び南側においてテラス状の平坦地や畠地が見られるが、地元では戦中戦後においてサツマイモ畑が開墾されていたといわれる。今山の北側には大きく今津湾が溝入しており、対岸には同じく玄武岩を産する鬼沙門岳が存在する。鬼沙門岳は、また滑石の産地でもあり、北側海岸部において滑石を採集することができる。

今山の西側は、現在今山川を挟んで、高祖山山麓まで水田地帯が広がっているが、これは江戸時代の干拓事業によるもので、今山周辺では近年まで塩田が存在したが、現在は宅地化している。

今山遺跡からは、中山平次郎博士の報告にも有るよう、古墳時代や歴史時代の遺物も出土する。分布調査では、旧石器時代の三稜ボウントを採集し、各調査地点から古墳時代の土師器や須恵器、鐵滓、中世の土師器、中国陶磁器、近世の甕など多種の遺構遺物を検出している。山内には、今山古墳が存在するが、詳細は不明である。また、今山に取りつく今宿砂丘上には、「元寇の役」に際して石築地が築かれており、今山に取り付いた石垣の一部が国史跡として保存されている。

今山遺跡は、Fig 6に示した範囲が、平成5年11月12日に国指定史跡となり、平成14年12月19日に追加指定をおこなった。

2. 歴史的環境

今山遺跡の立地は、現在は福岡市西区に編入されているが、歴史的にみると糸島平野に属し、「魏志倭人伝」の伊都国内に位置づけられ、古墳時代は「志摩県」に相当する地域である。今山遺跡の周辺では、長垂から延びる今宿の砂州上には、弥生時代前期から古墳時代の遺跡が形成されるが、弥生時代では、前期の亮棺墓の他、今宿・今山第3次調査では、細形銅劍を副葬した木棺墓が発見されている。古墳時代は、同様に墓地が形成されるが、特記すべきは製塙土器が出土しており、大規模な製塙遺跡の存在が推定できる。

今津湾岸では、旧石器時代から歴史時代までの遺跡が多数存在するが、今山遺跡同様の石斧製作遺跡としては、北西側に今津貝塚、今津長浜遺跡、春山遺跡があり、西北部の桑原川河口には桑原飛拂貝塚が存在する。桑原飛拂貝塚では、弥生時代中期の土器に伴い、石斧未製品の他、原材料となる玄武岩礫や剥片、チップが多量に出土している。また、今津湾の最深部には「伊都国」を象徴する志登支石墓が存在する。一方西南側の今宿丘陵地帯では、弥生中期の石斧製作跡の青木遺跡が存在する他、今宿五郎江遺跡などから石斧製品及び石斧未製品が出土した。

古墳時代には、今津湾を挟んだ対岸の高祖山から発生した丘陵地帯に今宿大塚古墳や鷺先古墳、若八幡古墳、丸隈山古墳などの12基の前期・中期の前方後円墳を中心として、11群約300基の後期古墳群が形成される。元岡桑原遺跡群では、7世紀代に今山遺跡第6次調査第6地点と同時期の大規模な製鉄遺跡が発見されており、この地域の製鉄生産が国家的な事業であったことが伺える。古代・中世におけるこの地域は海運を盛んとしており、博多湾の西の出口にあたる唐泊には、遣唐使船の中継地である韓亭がおかれ、西区周船寺周辺には、太宰府の機關である「主船司」が置かれていた。今津は、鳥羽天皇中宮領の怡上莊の中心的な役割を持ち、博多禪をもたらした崇西が根拠とした今津誓願寺を中心として对外交易をおこない、日宋貿易で栄えた博多に拮抗する繁栄を極めた。鎌倉時代の蒙古襲来時には、今宿海岸、今津海岸に元寇防壁が築かれ、国指定史跡として現状保存がなされている。

中世後半期には、戦略的位置を占めるこの地域において高祖城、柑子岳城を根拠とした豊後の大友氏、周防の大内氏などの争奪の場と化し、今津鷲城など中世山城が各所に造られる。江戸時代に入ると博多湾西部の浜崎、残島、今津、西浦、唐泊の五箇浦廻船が博多貿易を担い、この地域が伝統的に海運による交流拠点であったことを物語っている。

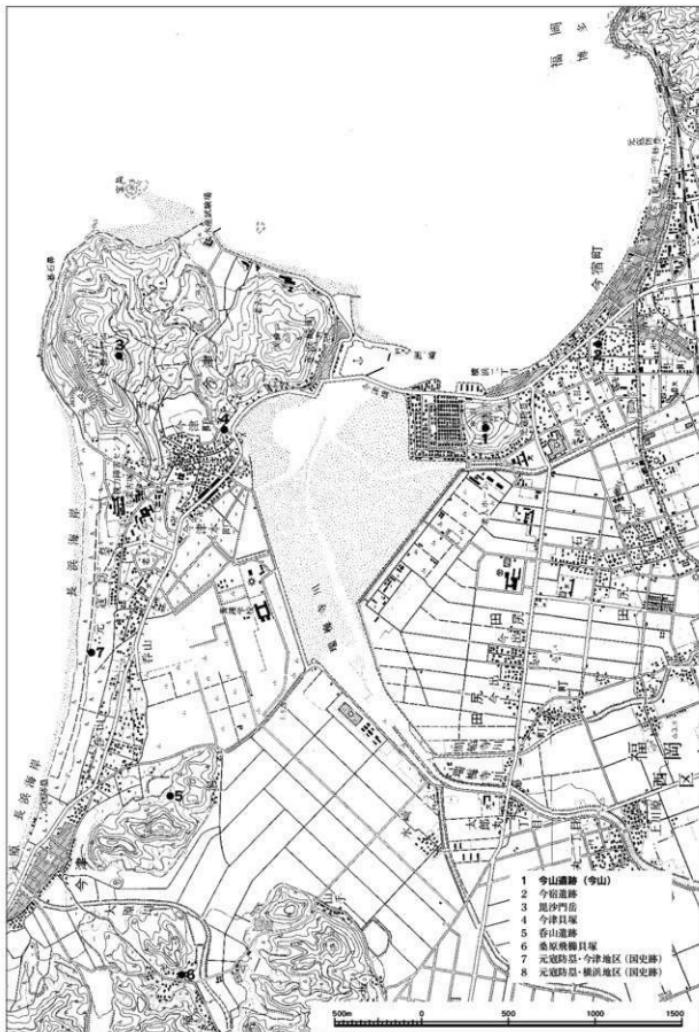


Fig. 3 今山遺跡位置図 (縮尺 1/25,000)

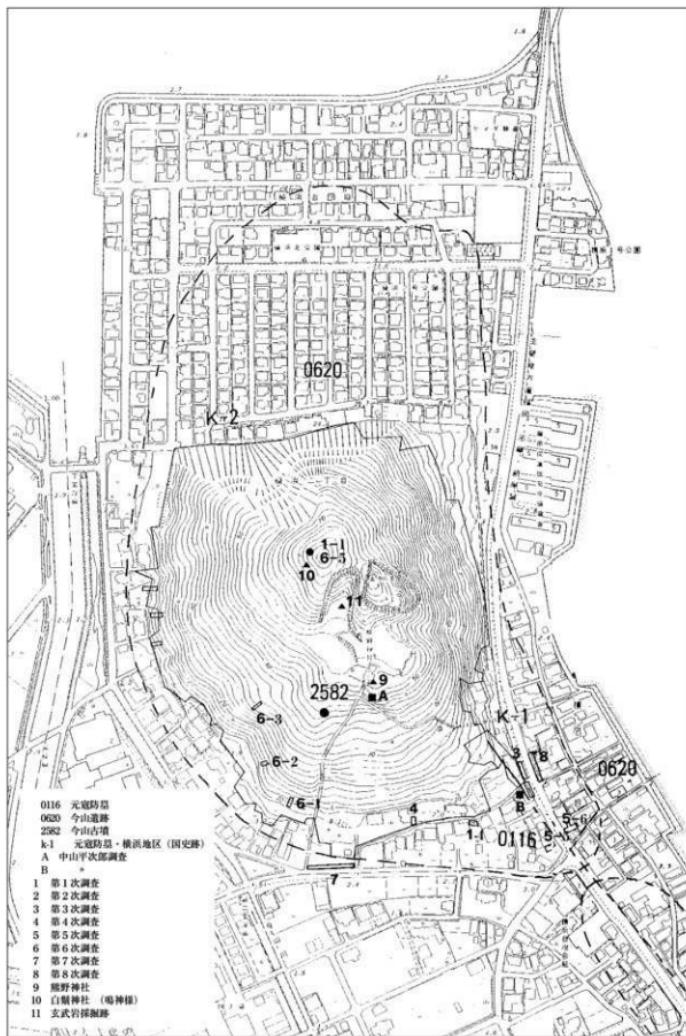


Fig. 4 今山道路調査地点位置図(縮尺1/4,000)

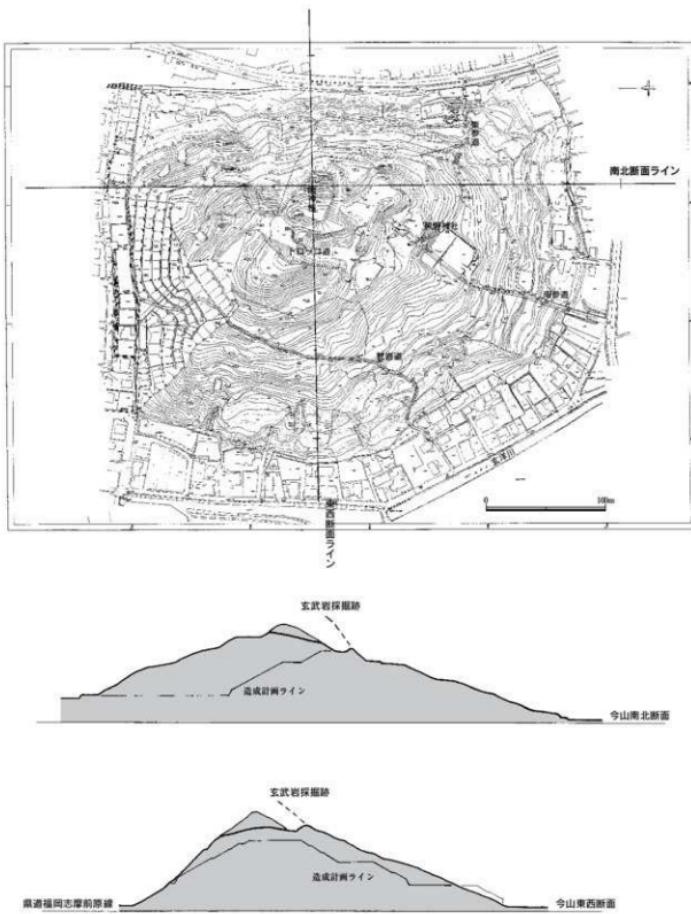


Fig. 5 今山測量図 (縮尺 1/2,500)



今山周辺の航空写真（昭和 50 年）

※国土地理院提供

第3章 今山遺跡第6次調査報告

1. 調査方法と概要

今山遺跡の調査は、昭和59年10月8日から開始したが、発掘調査に先立って、今山全体に50m四方のメッシュを組み、特に今山北西部の宅地造成計画区域内を中心として、玄武岩礫、未製品、剥片、チップ等の分布状態を把握するために調査を行った。その結果、現頂上（白鬚神社）の西南部斜面や今山西側中腹から山麓にかけて石斧未製品や剥片を含んだ礫群が存在し、また傾斜面に小さなテラスが存在することが判明した。今山北側の美浜台園地に近い西北部斜面においても20~30cmの礫群が分布しているが、竹藪化して山が荒れており、石斧未製品などの採集することもできなかった。また竹藪伐採に手間取ったことや、緩斜面及びテラス状の平坦部が認められなかつたことなどから、この地域には発掘調査の設定を行わなかつた。

以上の分布調査の結果を基にして、開発計画区域の緩斜面には第1~第6地点の6か所の調査区を設定した。また遺跡の史跡指定範囲の設定を視野に入れて遺跡の範囲確認するため地元のご協力を得て、今山北西部山麓帯の民有地においても第7~第11地点の5か所の調査区を設定した。この地域では、第10地点において玄武岩礫の分布が認められ、他の地点では、花崗岩バイランドが堆積していたため、第10地点は手作業による発掘調査を、他の地点は重機による掘削調査を行い、山麓部の土層堆積状況把握に努めた。

第1・2地点は、標高約30mの中腹に位置するが、ここからは中世の中国陶磁器や古伊万里片が出土した。戦中戦後を通じて、茶畠や芋畠があったと云われ、中世以来の山腹利用と、この周辺のテラス状の平坦面の造成時期が想定できる。第3地点は、白鬚神社の西側下位斜面の標高45~50mに位置し、トレンチ、及び拡張区より玄武岩礫群を検出した。礫群から石斧未製品の他、敲打具が出土した。第5地点は、現在は今山の頂上を形成しているが、そこに鎮座する白鬚神社は、元来の頂上が掘削を受けたため遷宮したことが想起される。白鬚神社は、航海・交通を司る猿田彦神を祭るもので、対岸の鬼沙門岳と共に中世今津湾からの船出を守護し、且つ近世の五箇瀬廻船の基地、今津を守護したものと考えられる。発掘踏査では、土師器皿片の他、中国陶磁器片が出土していることからも裏付けられる。

第6地点は、今山古墳が存在した付近にあるが、中世陶磁器の他、古墳時代の祭祀遺構と建物跡及び土師器や須恵器、鉄滓などの遺物が出土した。第7・8地点は、山裾部に位置する。第7地点では、汀線の砂浜が出現した。第8地点では、地山の花崗岩バイランドが今川沿いの道路下まで続くことが判明した。

分布調査は、今山西側を重点において調査したが、礫群の集積する地域に石斧未製品が散布する傾向にあった。これらの礫群は、山の開墾作業において集積された可能性がある。



Fig. 6 調査地点及び分布図（縮尺 1/2,000）

2. 各調査地点の遺構と遺物

(1) 第1地点

当該地は、熊野神社参道西側の標高20m～26mの斜面に位置し、幅4m～5mを測るテラス状の平坦面が段々に形成されている。この地形に対して南北方向の長さ15m、幅2mのトレンチを設定した。深さ約80～100cmにて、地山の黄褐色粘質土を検出する。表土は暗褐色粘質土、第2層は黒褐色粘質土、第5層はバイランドを含む粘質土である。断面で観察すると階段状の地形に盛り土を行い、幅広い平坦面を造成したことが判明した。出土遺物は、須恵器片、近世陶器片などで、玄武岩礫も散布していなかった。言い伝え通り戦中戦後において畠の開墾が行われたことを示すものである。



第1地点トレンチ全景 北から



第1地点トレンチ西壁土層①



第1地点トレンチ西壁土層②

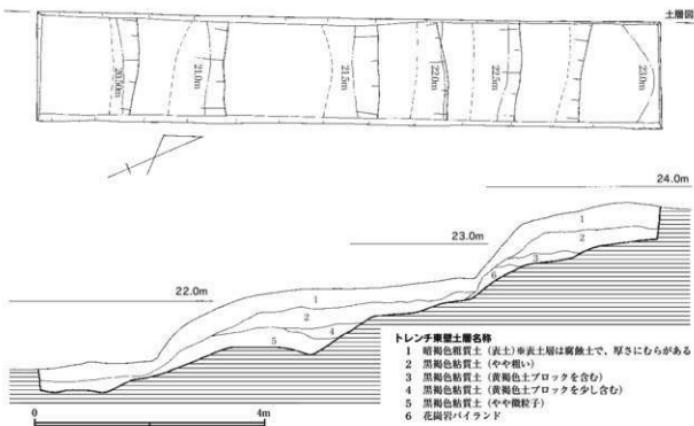
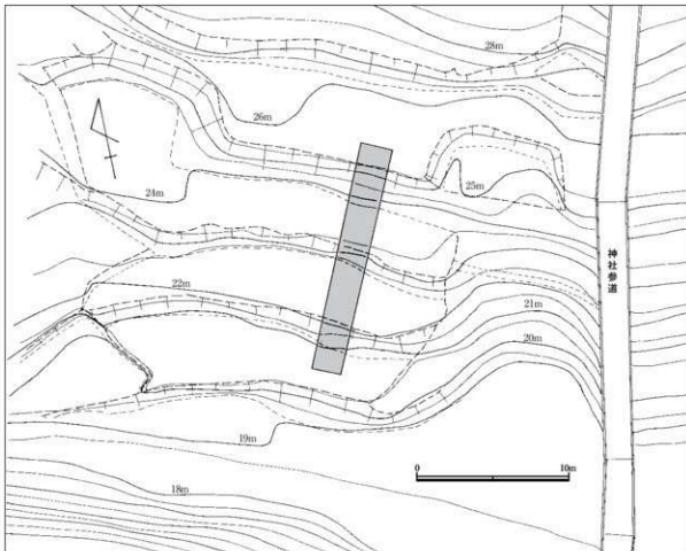


Fig. 7 第1地点位置図及びトレンチ平面図・土層図（縮尺 1/300, 1/80）

(2) 第2地点

標高 26 m ~ 28 m を測る緩斜面に調査区を設定した。当該地の地形においても幅 3 ~ 5 m のテラスを形成している。略南北方向に長さ 6 m、幅 2 m のトレンチを設定した。表土下の第2層において蹠

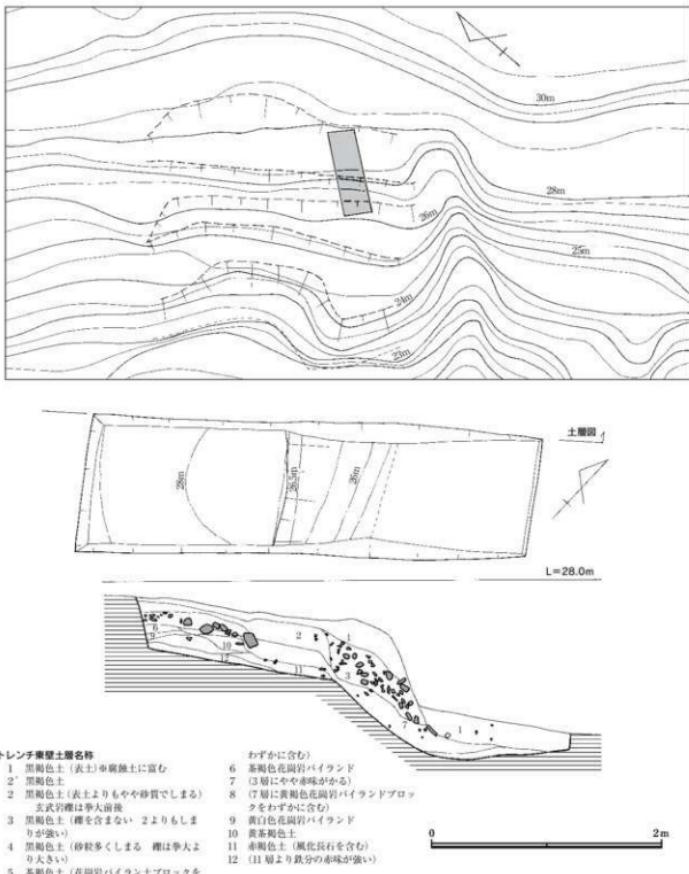


Fig. 8 第2地点位置図及びトレンチ平面図・土層図（縮尺 1/300, 1/60）

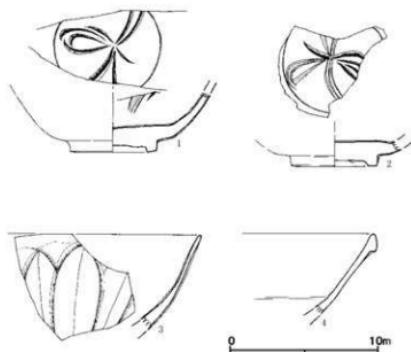
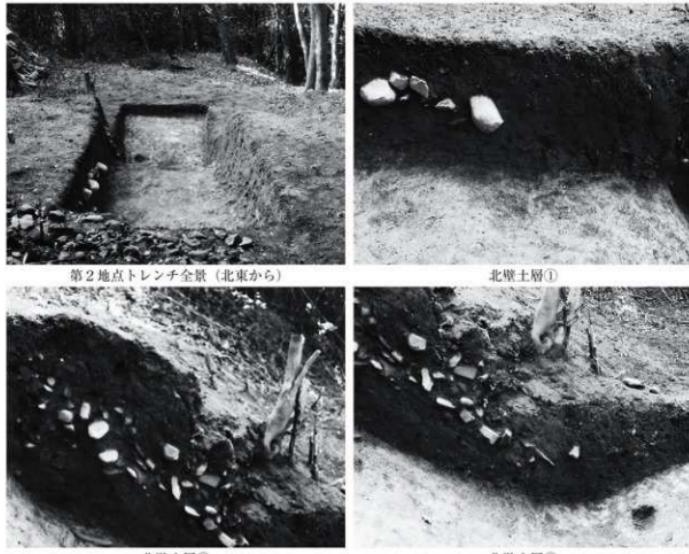


Fig. 9 第2地点出土遺物 I (縮尺1/3)

群を検出したが、平坦面を人為的に形成するために造成した際の流れ込みと考えられる。トレンチからは土師器や須恵器の細片の他、龍泉窯青磁のヘラ描きの花紋碗、鍋蓮弁紋碗、玉縁白磁碗が出土し、また、第2層の甃群中から石斧未製品、敲石が出土した。



北壁土層②

北壁土層③

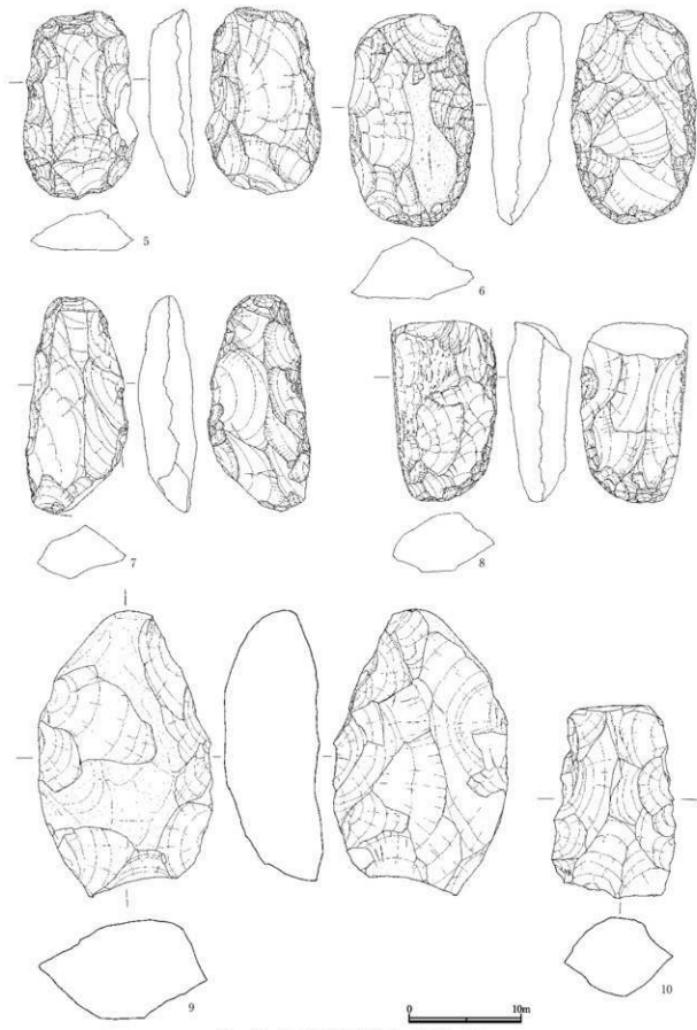


Fig. 10 第2地点出土遗物2 (縮尺1/4)

(3) 第3地点

当該地は、今山の西側中腹斜面、標高45～50mの間に位置する。標高45m付近には、北方向の山稜に在ったといわれる「鷲岩」に向かう幅1m程度の「鷲岩道」が南北に蛇行して続いている。この周辺には、幅5m～7mのテラスが存在するため、トレンチは鷲岩道上位の二つのテラスを縦貫する形で設定した。傾斜面に沿って東西方向に長さ14m、幅2mのトレンチの下位西側部分には、テラスを面的に調査するために拡張区を設けた。

堆積土の層序は、上層の表土、腐食土、第2層暗茶褐色粘質土、第3層暗黄褐色粘質土、第4・8の層の黒褐色粘質土の順になっている。第3層の暗黄褐色粘質土層から中～近世の陶器片や近世の土師質甕等も出土しており、また第4・8層の黒褐色粘質土層も土器が出土していないが、後世の堆積土と考えられる。

疊群は、これらの下層傾斜面に堆積しているが、トレンチの西側の拡張区が接する部分の疊群は、後世に取り除かれている。トレンチ東側上位には南北方向に幅約50cmの溝が存在する。この溝は、近世の水甕の出土から排水施設と考えられる。このトレンチ疊群から玄武岩原石、割り材、石斧未製品の他、緑泥片岩及び玄武岩製の敲打具、そしてフレイク、チップが多量に出土した。

拡張区は、トレンチの下段テラス部分に設け、規模は4m×5mを測る。層位は第1層が表土の腐食土、第2層が黒色粘質土、第3層は固く締まった黒色粘質土である。これらの下層に人頭大から拳大程度の疊群が、ほぼ平坦に堆積していた。大量のチップ、フレイクと石斧未製品が幾つか重なった状態で層をなしている。原石、割り材、石斧未製品160点、敲打具15点、及び多量のチップ、フレイ

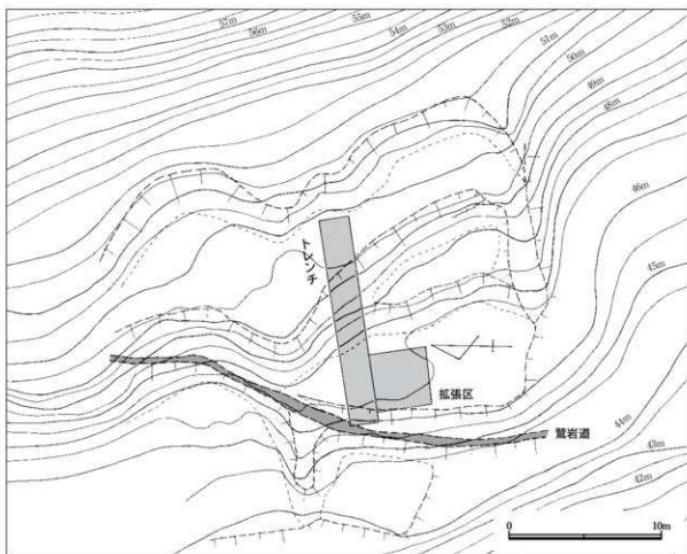


Fig. 11 第3地点調査位置図（縮尺1／300）

ク等を検出した。

石斧は粗削工程から打製工程までの段階の石斧未製品 12 本を検出したが、長さ 15 cm から 30 cm までのばらつきがある。又、作り方は、縁刃剥離が丁寧な石斧と、原材（丸石）を二つに割ってフレイクを作り、その片面の縁刃を軽く剥離調整するというだけの簡単な未製品もある。素材作りから敲打段階までにおいて規則性は見られない。石斧製作時に出る剥片やチップはほとんどが風化面を残している。

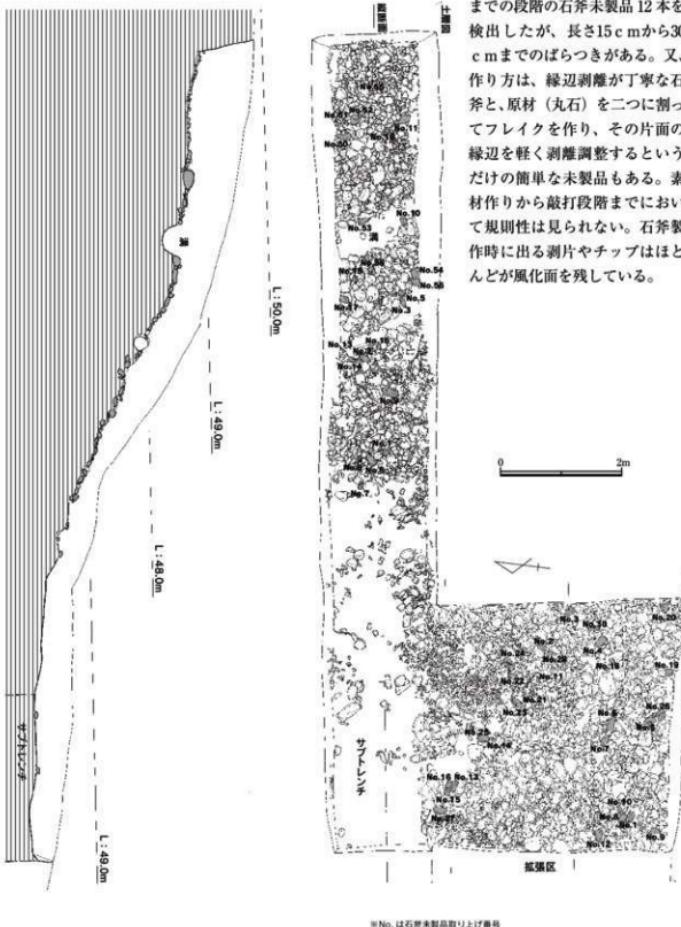


Fig. 12 第3地点トレンチ拡張区平面・断面図（縮尺 1/60）

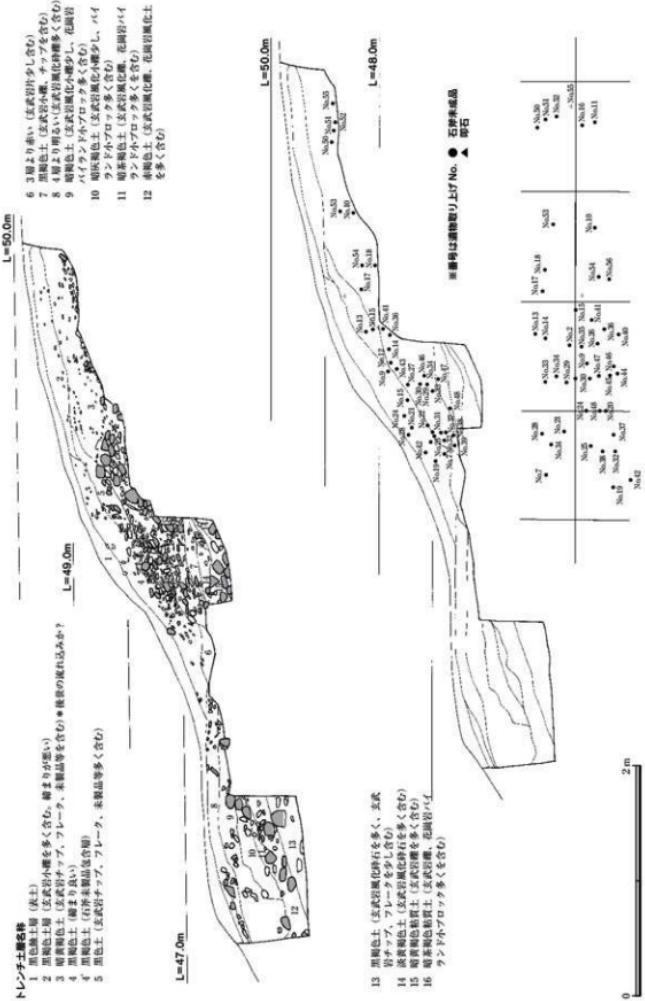


Fig. 13 第3地点トレンチ北壁土層図・石斧未製品分布図（縮尺1／80）

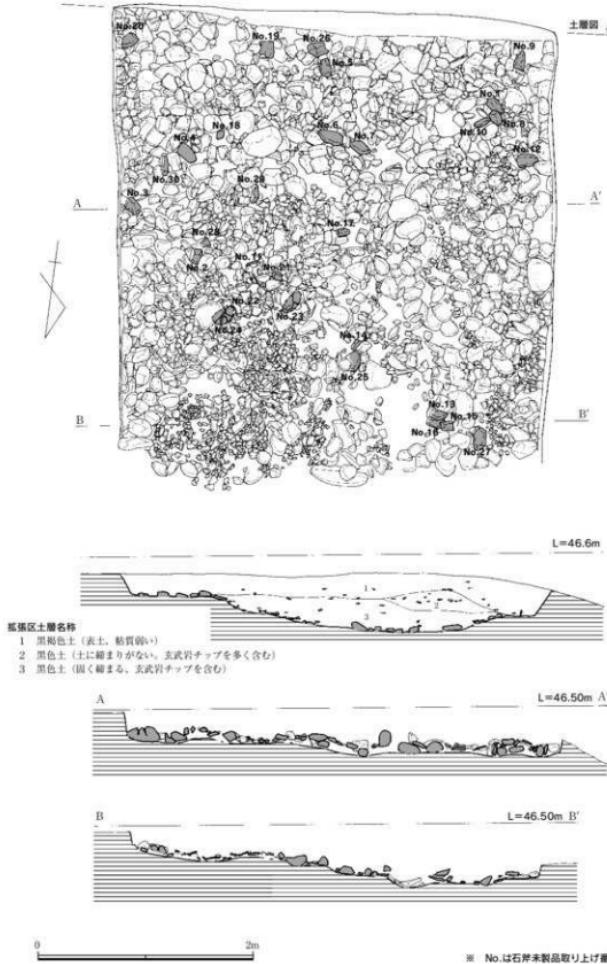


Fig. 14 第3地点拡張区平面図・断面図 (縮尺1/40)



第3地点トレンチ全景
西から



トレンチ内の砾部 西から



第3地点拡張区全景 東から

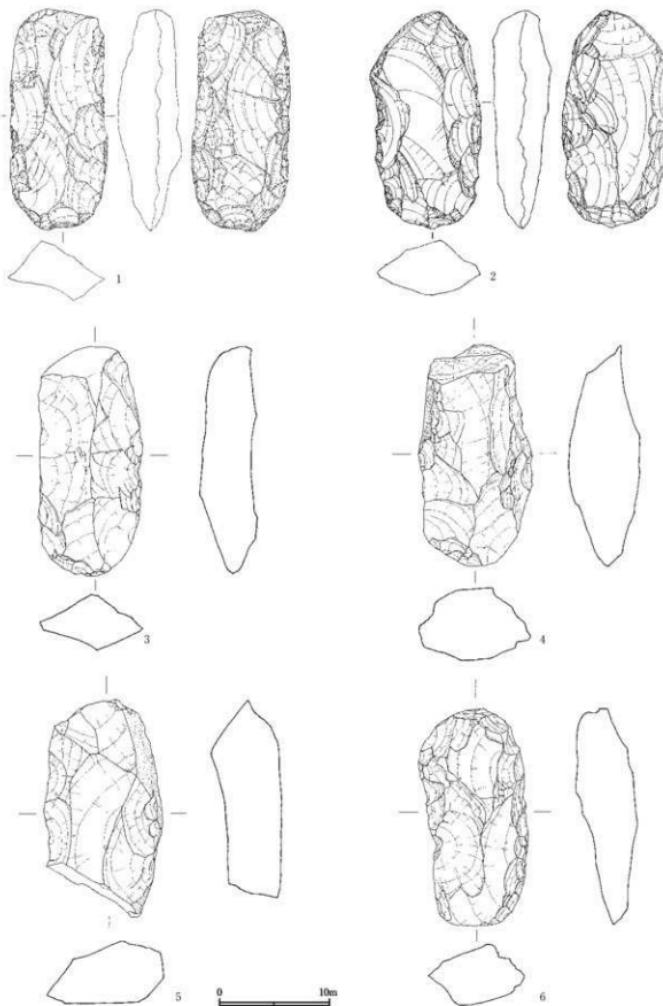


Fig. 15 第3地点出土物1 (縮尺1/4)



Fig. 16 第3地点出土遗物2 (縮尺1/4)

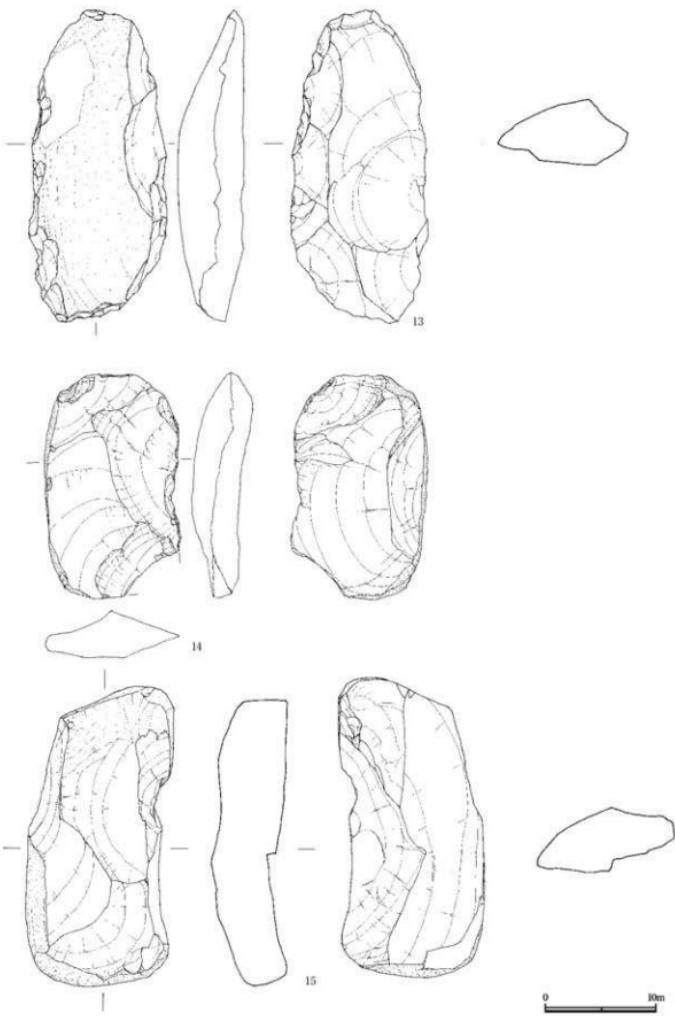


Fig. 17 第3地点出土遗物3 (缩尺1/4)

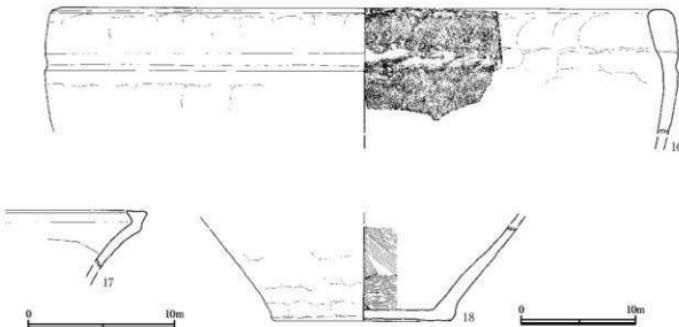


Fig. 18 第3地点出土遺物4 (縮尺 1/3, 1/4)

第3地点の東上方、標高75m付近には玄武岩風化露頭面があり、その下位に風化転落した直径40cm前後の円塊が散在している。この円塊は表面が風化しており、拡張区出土の表面が荒れた風化チップ群は、これらの風化円塊を原材料として用いたためであると考えることができる。調査ではこのような風化円塊の他、素材の割石、フレイク、チップ、そして各工程の石斧未製品、敲打具が出土しており、この地点が円塊を原材として利用した石斧製作跡と考える事ができる。



第3地点トレンチ上部の礫群 西から

第3地点トレンチ柱状玄武岩塊 西から

(4) 第4地点

当該地は、標高 49 m ~ 55 m の間に位置している。第3地点の北側に位置し、幅 5 m 程の小さなテラスが形成されている。標高 50 前後の斜面に鷺岩道が北に登っている。長さ 3 m、幅 2 m のグリッドを設けたが、深さ 30 cm で、地山の黄褐色粘質土に達した。遺構・玄武岩砾群は検出できなかった。

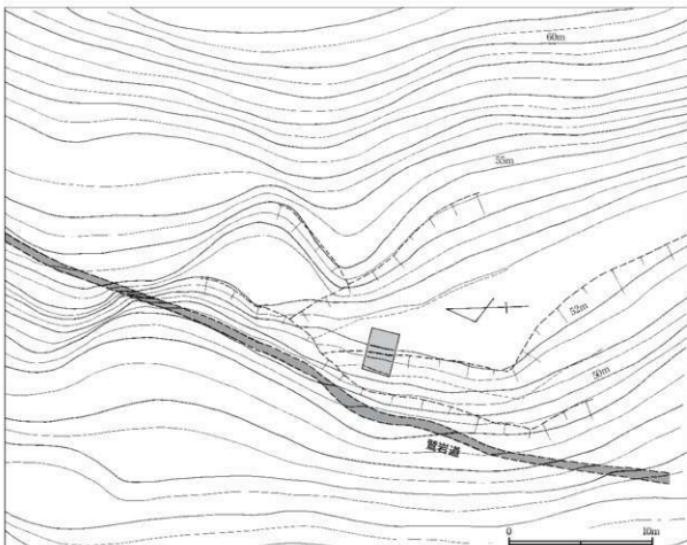


Fig. 19 第4地点調査位置図（縮尺 1/300）



第4地点全景 南から

第4地点全景 東から

(5) 第5地点

標高約80mの現在の今山頂上に位置し、緩やかな平坦面を形成している。この平坦面の北端に白鬚神社が鎮座しており、長さ約4.8m、幅約2.5mの玄武岩露頭が御神体の役割を担っている。昭和43年の第1次調査では、この露頭から石材を切り出し、その石材を加工して石斧を製作したのではないかと推定している。この頂上周辺には、人頭大の円錐や角錐が多く散布しており、大型の石斧未製品を採集する事が出来た。

発掘調査は、御神体の玄武岩露頭の東西両側に2ヶ所（第1トレンチ東・西）と、標高79mの頂



御神体の玄武岩

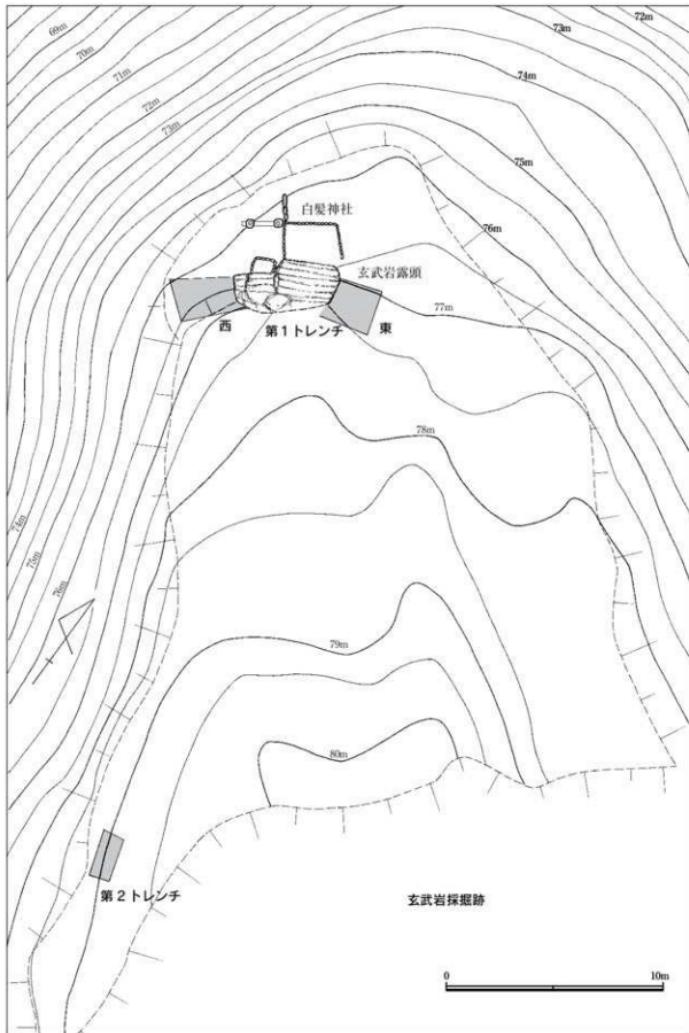


Fig. 20 第5地点トレンチ位置図（縮尺1/200）

上南端の平坦面に1ヶ所（第2トレンチ）の計3ヶ所を設定した。

第1トレンチ東は、幅2m、長さ3mの規模を測り、表土を掘り下げるとすぐに玄武岩の風化した小礫の間層があり、下の黒褐色土から多數のフレイクやチップ、17点の石斧未製品が出土した。地山の暗褐色土上には、大型の角礫や割り材が存在した。出土した未製品は、長さ7cm～15cmの中・小型のもので、25cm前後の大型品は少ない。

第1トレンチ西の規模は、幅2m、長さ3mを測る。上層は、厚さ60cmを測る後世の堆積層で、この層の中からも30cm大の礫や、フレイク、チップが流れ込むように堆積していた。この層の下層黒褐色土層、及び地山上面にフレイク、チップ、小型の石斧未製品が散布した状態で出土した。石斧未製品は非常に小型のものが多く、厚さ10cm前後、幅5cmを測る。

第2トレンチは、長さ22m、幅1mを設定した。表土下は、黒褐色粘質土、地山は淡黄褐色土である。多くの玄武岩風化礫の他、フレイク、チップが出土した。

第5地点周辺では、分布調査の際に大型の石斧未製品を採集したが、第1トレンチの調査で、検出した石斧未製品はほとんどが小型の薄手である。薄手の未製石斧は打製石斧状を示しており、頂上付近の石斧製作が縄文時代に始められた可能性を示している。

また、現存の玄武岩露頭を石材として使ったかどうかはともかくとして、ここで石斧製作が行われた事は、疑いの余地がない。

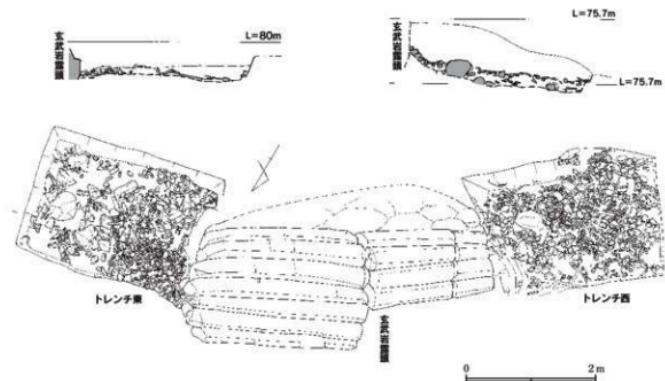


Fig. 21 第5地点第1トレンチ平面・断面図（縮尺1/40）

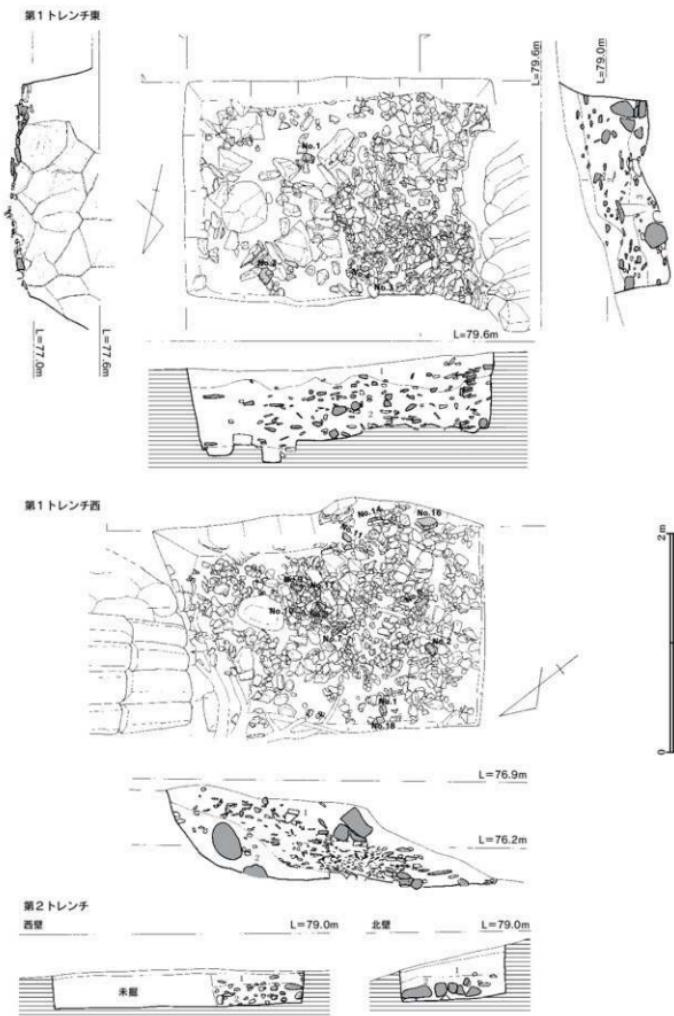


Fig. 22 第5地点第1・2トレンチ平面図・土層図（縮尺1/40）

第1トレンチ東



第1トレンチ西



第2トレンチの状態





Fig. 23 第5地点出土遗物 (缩尺1/4)

(6) 第6地点

熊野神社参道の北原雁木に近い、標高7m～9mの間に位置する幅8m、南北長16mの平坦面にグリッドを設定した。グリッドの規模は、3m四方である。深さ約150cmまで褐色粘質土及びバイランド混入土が堆積している。

層位は、第1層は表土、第2層はマサ土の堆積土、第3層の黒褐色土は、北から南方向に流れて堆積した10cm～30cm大の礫群が存在するが、後世の埋め立てによるものと考えられる。遺物は礫の間に入った様な状態で、土師器の皿、中国製の青磁碗、白磁碗、甕が出土した。土師皿から12世紀後半の土層と考えられる。第4層の暗褐色粘質土からは土師器の皿、須恵器の杯、甕の破片が出土した。第12層の暗褐色粘質土は遺構面を覆っている層である。

遺構面は、第18層の暗褐色粘質土で、柱穴及び祭祀遺構、焼土面を確認し、祭祀遺構からは、土



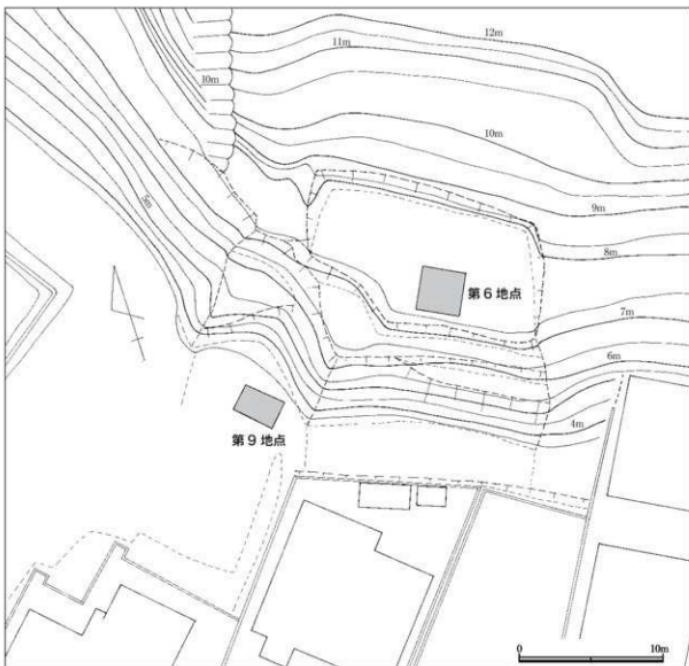


Fig. 24 第6・9地点位置図（縮尺1/300）

師器の椀、甕、須恵器の杯蓋、高台付椀、高杯が出土した注目すべきことは、土師器の甕、須恵器の高杯の中から鉄滓、及び鉄器が出土したことで、製鉄生産に関する遺構と考えられる。出土遺物により7世紀後半の時期と考えられる。

また、祭祀遺構の南側に柱穴7個を検出したが、うち4個は東西にはば等間隔に並んでいることから掘立柱建物の存在が考えられる。祭祀土器群はこの建物内から出土したものとかんがえられ、製鉄跡に関する祭司建物、工房建物などが考えられる。

出土遺物はFig.26に図化しているが、時期は古墳時代から中世に及んでいる。1～4、7～10は須恵器で、1の天井外面部にはヘラ記号がある。3は、奈良時代の須恵器高台付き壺である。4の高壺内には鉄が銷びついた状態で入っており、分析を行っていないが鉄滓ではなく砂鉄を盛っていたことも考えられる。5は土師器の壺である。9は大型の器台と考えられ、外面に櫛搔きの波状紋が施されている。6は中国製の玉縁白磁碗、11は土師器の瓶、12・13は同一個体と考えられ、土師器の長胴甕である。12は瓦質土器の鉢で、内面に細かい刷毛目調整を施している。中世の時期である。他に中国製の陶器甕の破片が多数出土している。

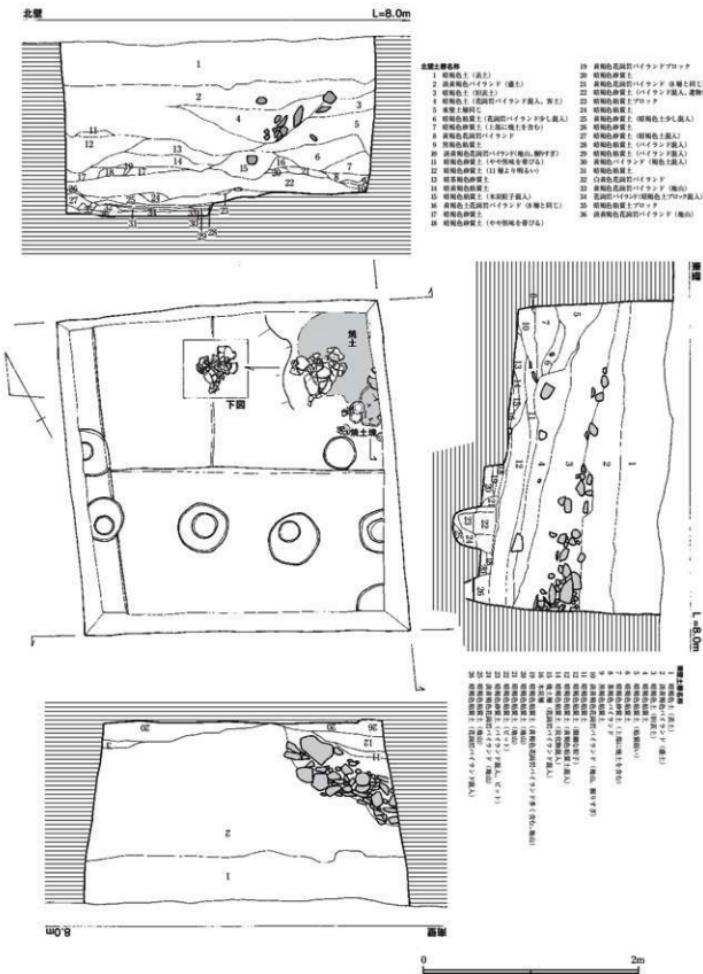


Fig. 25 第6地点グリッド平面図・土層図（縮尺1/40）



遺構面遺物出土状態



グリド南面土層



祭祀遺物出土状態



高環と鉄滓



土師器壺内鉄滓出土状態

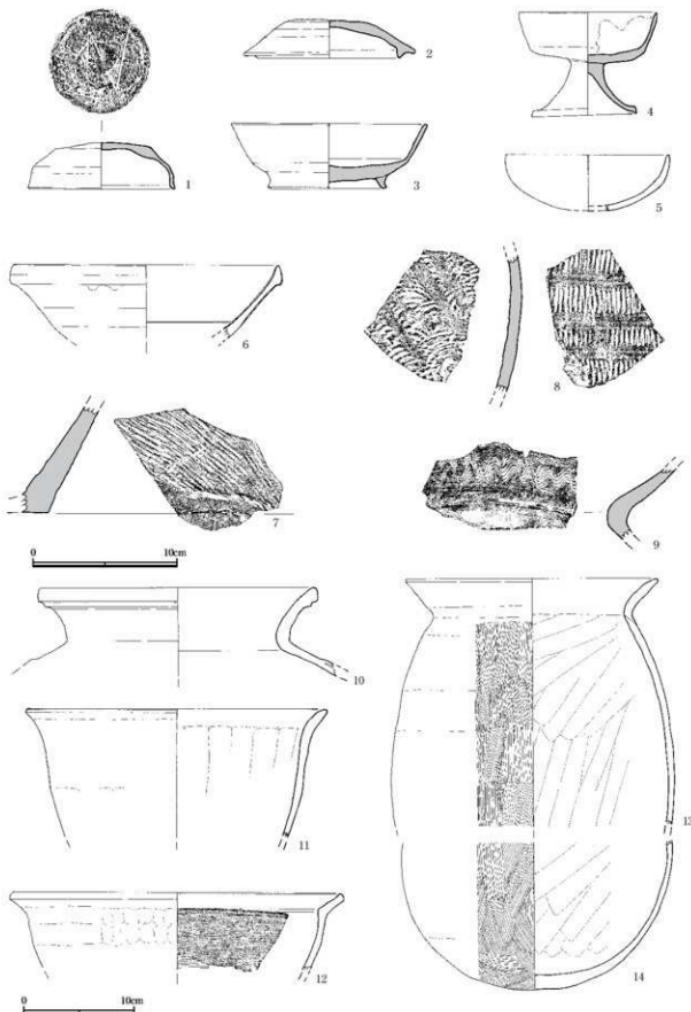


Fig. 26 第6地点出土遗物 (縮尺1/3, 1/4)

(7) 第7地点

今山の西側山麓、標高約2mを測る石田家住宅地の畑に在って、第9地点の西側に位置する。遺跡の範囲及び海岸汀線を確認するため調査を行った。長さ約3mのトレンチを東西二ヶ所に設けた。調査は、深さを考慮して重機を用いて行った。北トレンチは深さ1.6mを測り、表土の第1層は、約75cmの盛り土で、マサ土が混入した黄灰色土、第2層は約30cm

を測る青灰色粘質土、第3層は、約55cmの暗青色砂質土、第4層砂層である。海岸汀線を示している。

南トレンチは、深さ1.7mを測り、表土は盛り土で、深さ約1mの暗黄灰色砂質土、第2層は約70cmの深さの暗青灰色粘質土、最下層は80cm以上を測る黒灰色のヘドロ層で、10cm~30cmの玄武岩礫を多く含んでいる。内海を示していると考えられる。



第7地点北トレンチの状態



Fig. 27 第7地点位置図 (縮尺1/500)

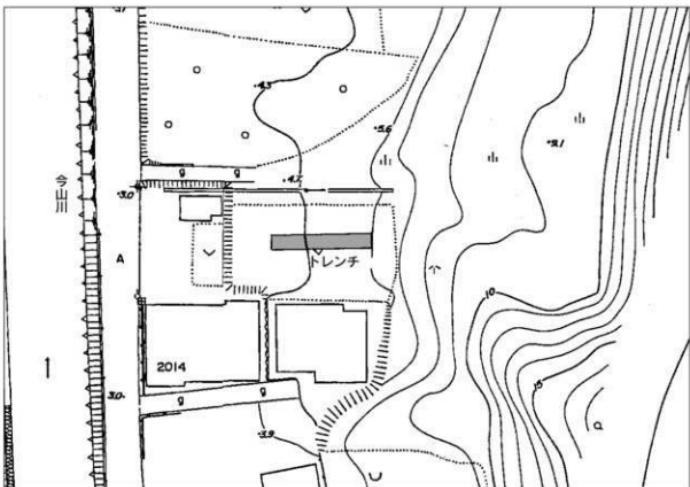
(8) 第8地点

今山北西部の板屋家住宅の畠内に設定した。山麓部に位置し、標高約5.5mを測り、地表面は北から南へ傾斜している。この地域は、今山の防災上土砂流出している懸念されている地域である。

トレンチの長さ12m、深さ2.5mを測る。第1層は、表土のマサ土、第2層は黒灰色粘質土で、大きな玄武岩礫を含んでいる。第3層は黄褐色砂質土で、黒灰色の間層がある。小さな礫を含んでいる。第4層は暗青灰色砂質土で、マサ土を含んでいる。第5層は黄灰色砂質土のマサ土である。第6層との間に深さ5cmの黒灰色砂質土を挟んでいる。第6層は黄灰色マサ土である。第7層は灰黄色砂質土のマサ土、第8層は黄褐色砂質土、第9層は地山のバイランドである。



第8地点トレンチの北壁土層状態



(9) 第9地点

第6地点の西側、標高約3mを測る山裾に位置しています。幅2m、長さ3mのグリッドを設定した。

グリッドの土層は大きく5層に分かれ、第1層表土の黒褐色土、第2層暗茶褐色砂質土、第3層黒色砂質土、第4層やや暗い青灰色砂質土、第5層花崗岩バイランドの二次堆積層である。

第4・5層には、直径径20~30cmの玄武岩礫

を多く含んでおり、山麓部の土壤堆積の様子がわかります。また、第4層の青灰色砂質土の状態から



第9地点土層状態

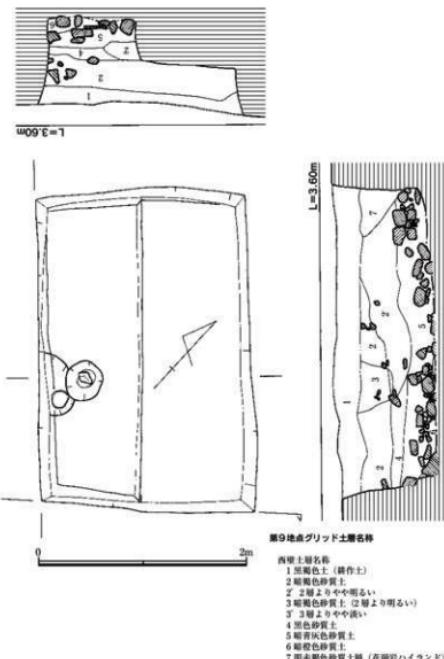


Fig. 29 第9地点グリッド平断面及び土層図(縮尺1/40)

湧水及び海岸汀線が近いことを示している。

グリッドの第2層上面では径30cmの穴を検出した。深さ30~50cmを測りPit内には根詰め石が入っていたので柱穴と考えられる。

表土から石錐が1点出土している。柱穴から土器器が出でていることから古墳時代に成って山裾の海岸部に生活適地が広がったことが考えられる。

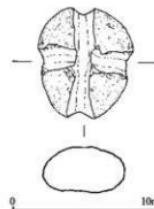


Fig. 30 第9地点出土遺物
(縮尺1/3)

(10) 第10地点

今山西側山麓の標高3.5mを測る小田部家邸内に位置する。これより約20m西側の道路下が海岸汀線であったと思われる。試掘溝（トレンチ）は2本設定し、それぞれのトレンチは旧家屋と新家屋の間（1号トレンチ）と旧家屋裏（2号トレンチ）にT字状に設定した。この地点は開発計画地域に入っていないが、遺跡の範囲を知る上で最も重要なところで、これまで地域の郷土史家などの住民によって石斧の未製品や敲打具などが多く採集されている。

1号トレンチでは地表から約1mのところで玄武岩礫群に達した。礫は角礫が多く、長さ30~60cmを測り、表面は鉄分が付着するため茶褐色に汚染されている。ここでは石斧の未製品やチップは出土しなかった。

2号トレンチでは、地表下約20cmに黒褐色粘質土層が存在し、約30cmの厚さに礫が堆積している。この層から素材の石塊やブレイク、チップが大量に出土した。その下層は大型の角礫やバイランドの混入した層であるが、ブレイク、チップは含まない。黒褐色粘質土の礫群には、材料となる原石や素材となる削石、そして各製作段階の石斧未製品を検出した。原石はいずれも鉄分で茶褐色に汚

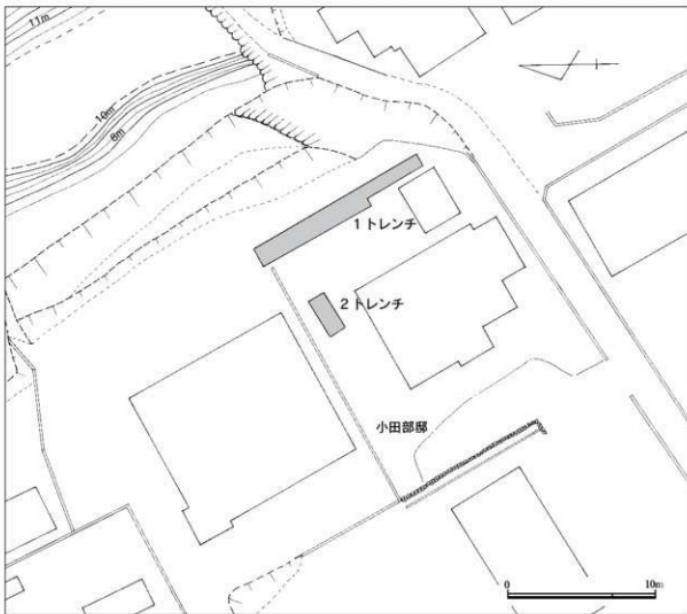


Fig. 31 第10地点調査位置図（縮尺1/300）



第10 地点調査前の状況



第2 トレンチ断面の剥片・礫の状態



第2 トレンチ発掘調査の状態西から

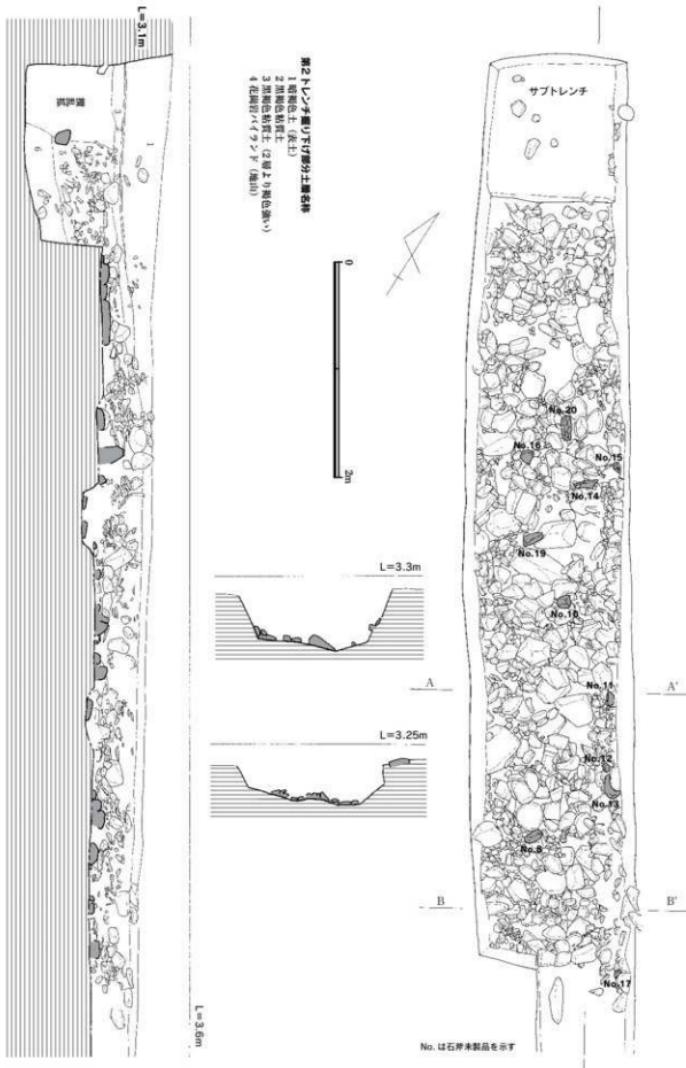


Fig. 32 第10地点第2トレンチ平面・断面図 (縮尺1/40)

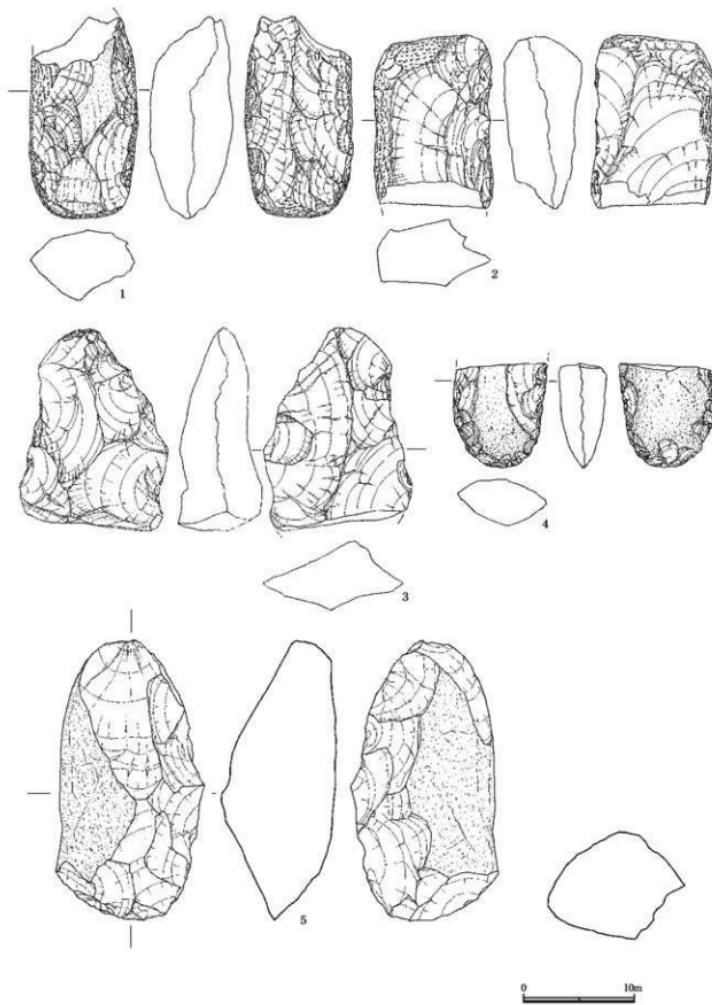


Fig. 33 第10地点出土遗物1 (缩尺1/4)

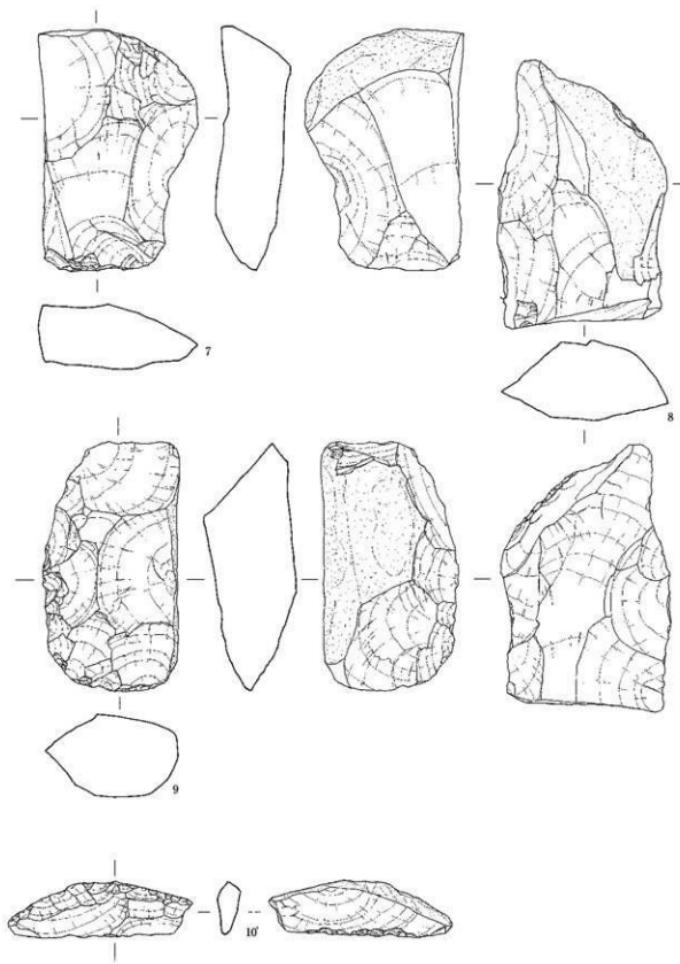


Fig. 34 第10地点出土遺物2 (縮尺1/4)

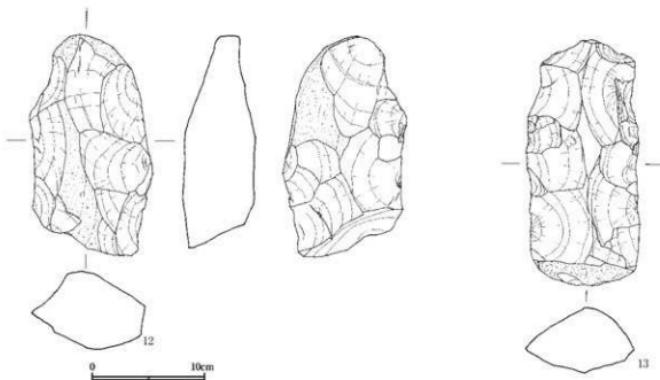


Fig. 35 第10地点出土遺物3 (縮尺1/4)

染されているが、大部分が第1トレンチ内より検出した棒群と同じく角張っている。これらの原石の散布は元来、山麓から海岸汀線付近に玄武岩の柱状露頭が倒壊した状態にあったものと思われる。

これらの角礫を数等分に割って石斧の素材としている。第II段階の未製品は、長さ23cm前後、幅10cm前後、厚さ6cm前後のものが多く出土しており、角礫を用いた素材作りが一定の規格品製作を可能としたものと考えられる。又、海岸近くの転石を利用したのは製品の運搬に便利な海運の利用を行ったためと思われる。当地点が石斧製作跡として断定するには資料不足であるが、仮に石斧製作過程における残滓物の投棄場所であったとしても、この周辺における石斧製作が熟練した技術によって規格品を多量に製品化していた事実は重要である。

時期については、弥生時代中期初頭頃の土器細片が数片出土している。



第2トレンチ掘り下げの状態西から



第10地点の柱状露頭

(11) 第 11 地点

今山西側山麓部で、第10地点の北側に位置し、標高約4mを測る。渡辺家の畠地に25m四方のグリッドを設定した。深さ約60cmの地山のバイランド上面にて柱穴状のPitを検出した。土層は、第2層から第7層まで花崗岩風化土を主体としており、第6層の黄褐色粘質土と第7層の茶褐色砂質土には20cm大の玄武岩礫を含んでいる。

遺物の出土はない。

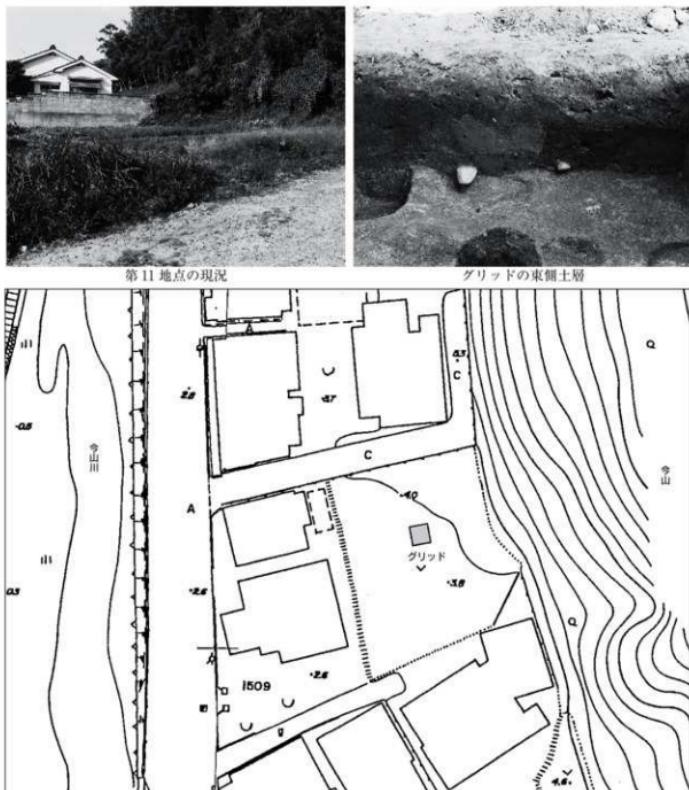


Fig. 36 第11地点グリッド位置図 (縮尺1/500)

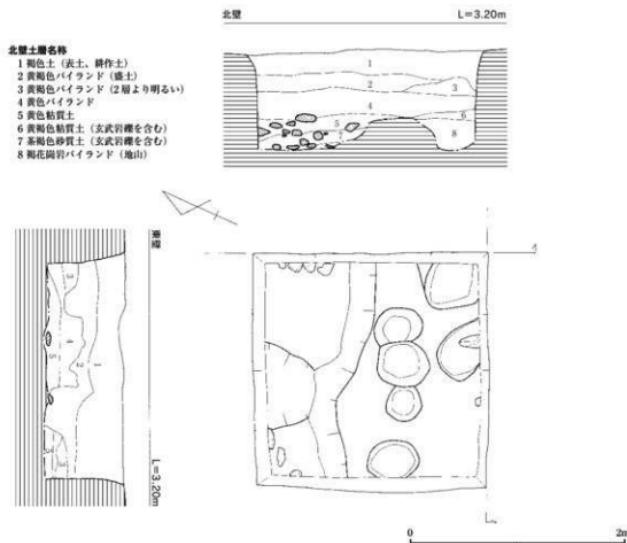


Fig. 37 第11 地点グリッド平面図及び土層図（縮尺1/40）

(12) 分布調査

発掘調査に先立って調査区を設定するために今山の西北側を中心に分布調査を行った。その結果は、Fig 6に示したように広い範囲にて石斧未製品を探集した。また玄武岩礁の散布地、もしくは礫群を把握することができた。礫群は、現山頂部のように礁が自然に散在して、適宜に素材を得ることができたと考えられる場所もあるが、礁群の多くは今山の開墾によって集積されたものと思われる。しかし、その中には未製品の他、素材やフレイク、チップ、敲打具など石斧製作にかかる遺物を含んでおり、近辺において製作地跡を推定する手掛かりと成り得る。また第3地点の上位地帯には、人頭大の風化礫層が存在しており、製作跡と露頭が立地的に有機的な繋がりを持っていることが分かった。

採集資料には、サスカイト製の三稜ポイントがある。玄武岩石斧未製品は、141点採集したが、時期比定はできていないが、規格に統一性がなく、8cm大の小型品から28cm大の大型品も存在する。素材そのものも割石を素材としたものから、手頃な風化礫に加工を加えたもの、扁平な剥片を素材とするものなど、様々な様相を持っており、今山の玄武岩石斧の製作実態を物語っている。

第4章 今山遺跡採集遺物

今山遺跡は、前述したように中山平次郎博士の研究・報告以来全国に知られるようになった遺跡であるが、その結果、多くの方が遺跡を訪れ、石斧未製品を採集されている。遺物の散逸していくことに憂慮された地元在住の郷土史家ならびに有志の方々によって資料が保存のために採集された資料である。

1. 大内土郎氏採集遺物

今宿横浜在住の大内土郎氏が高校生の頃から精力的に採集された遺物である。表採範囲は、今山遺跡、今宿遺跡、今津貝塚、長浜貝塚、周船寺など今山を中心とした地域である。その一部は福岡市博物館に寄贈されている。今回報告書に掲載した玄武岩石斧未製品は、第6次調査時においてお預かりし、実測した今山遺跡表採資料である。

小型の盤状石斧未製品、棒（矢）状の石斧未製品、大型・小型石斧未製品、扁平な片刃状石斧、石鎌未製品、第III段階の敲打成形時の石斧、縄文時代の乳房状石斧の形状を残す未製品等多種多様な形態をもった未製品が採集されている。その多くは、採集地の地点記入されており、今後の参考となり得る。

2. 上原勇夫氏採集遺物

今山遺跡において精力的に採集されている。大部分は、旧福岡市歴史資料館（現在福岡市博物館収蔵）に寄贈されている。採集遺物に発見地点の注記はなく、どの場所で採集されたか不明である。Fig42-10は、体部の打製整形の後、側面から敲打成形を行っている未製品である。

3. 西南高等学校収蔵遺物

今山遺跡表採の玄武岩未製品は、21点ある。大内土郎氏が西南高等学校在学時にクラブ活動の一環として採集した資料である。

4. 玄洋中学校収蔵遺物

今宿横浜在住の故板屋猛氏が今山周辺にて採集された資料である。板屋氏は、福岡市市議会議員を務められ、今山遺跡の保存及び国史跡指定に関しては尽力してきた。

遺物は、玄武岩石斧未製品の他、弥生土器、土師器、須恵器など多岐にわたっている。その内、今山遺跡出土品として弥生時代中期の壺形土器や、第6次調査第6地点出土の須恵器高杯、壺蓋と同形のもの、須恵器高杯、提瓶がある。

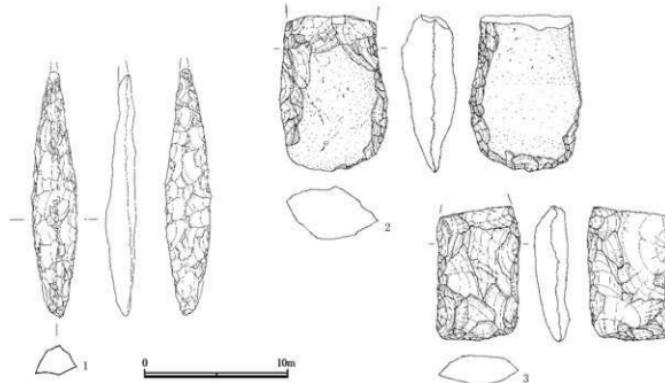


Fig. 38 分布調査表採遺物 1 (縮尺 1/4)

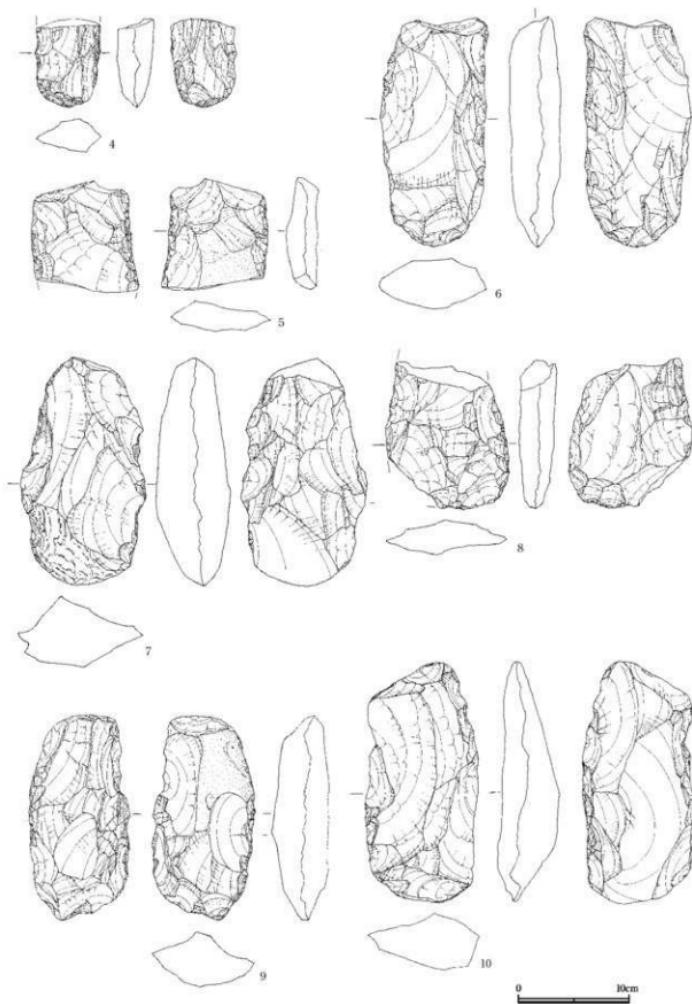


Fig. 39 分布調查表採遺物 2 (縮尺 1/4)

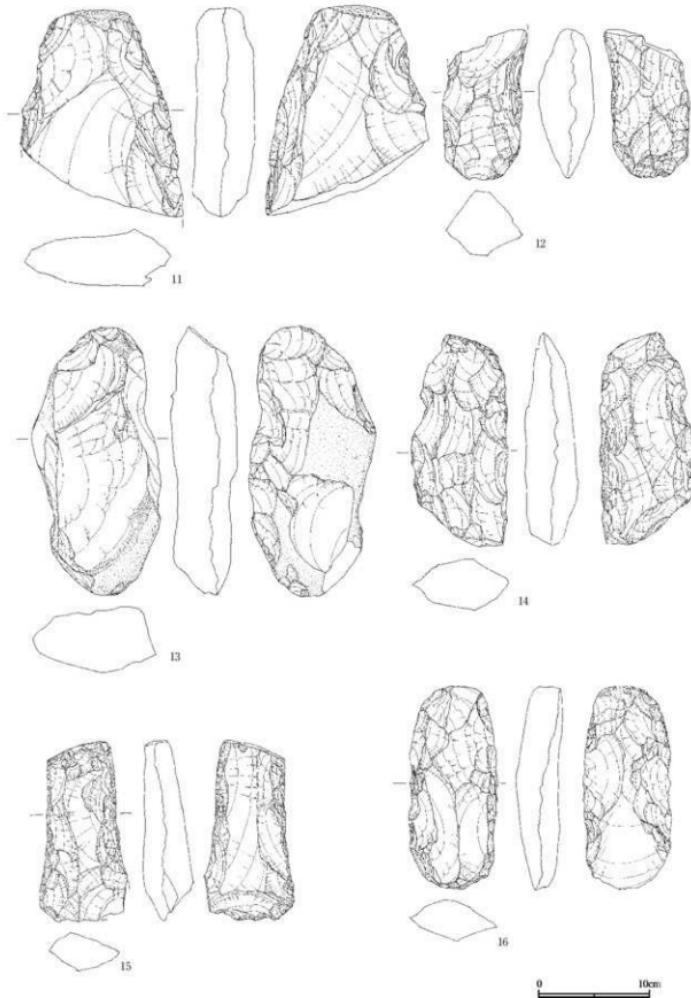


Fig. 40 分布調査表採集物 3 (縮尺 1/4)

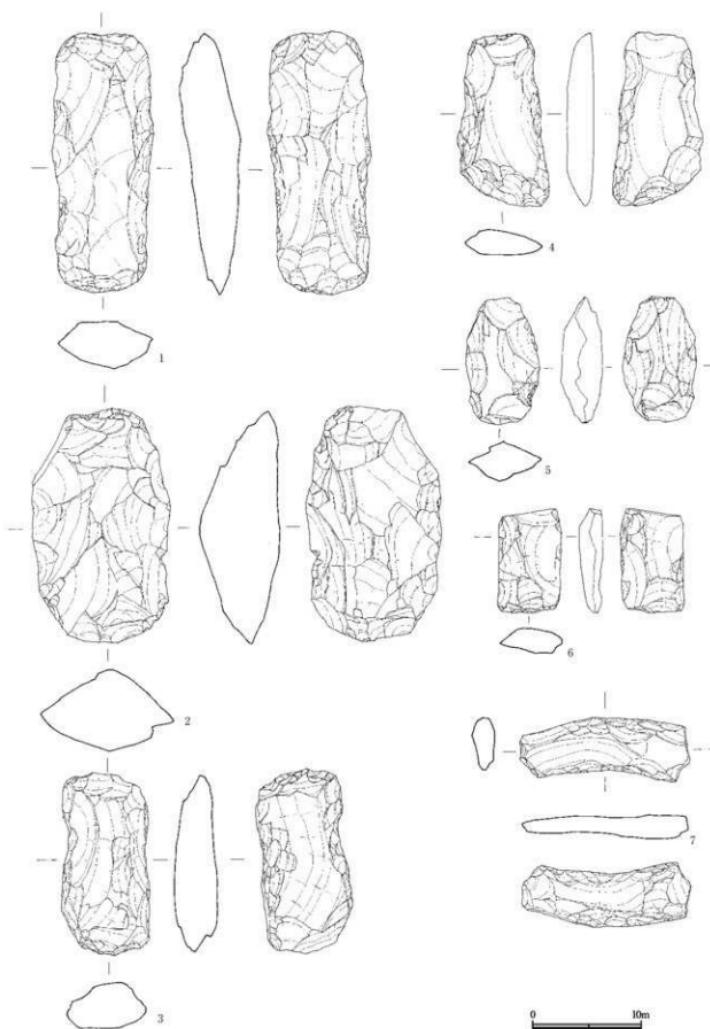


Fig. 41 参考表採遺物 1 (縮尺 1/4)

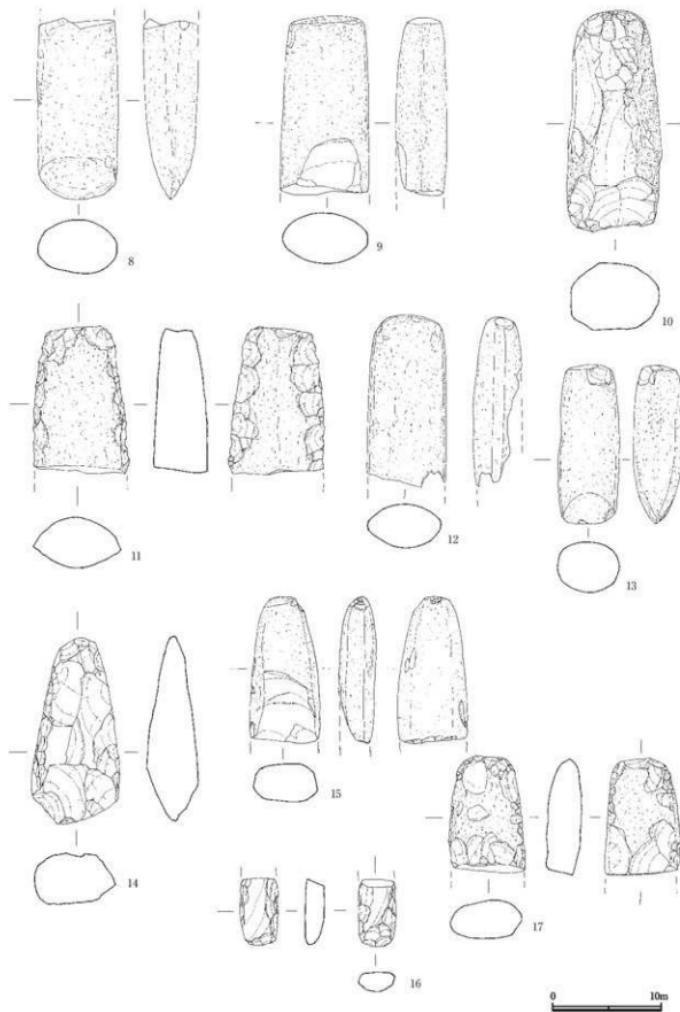


Fig. 42 参考表採遺物 2 (縮尺 1/4)

第5章　まとめ

発掘調査及び分布調査によって今山遺跡が、縄文時代から江戸時代に至るまで活用されていること、また近代の土地利用や歴史探査利用等の全体像が明らかになった。特に当初の調査目的である弥生時代石斧製作跡の分布状況については、立地条件の把握により、石斧製作跡の場所を特定することが可能となった。

今山遺跡の石斧製作については、第8次調査報告によって縄文時代前期に始まり弥生時代中期初頭まで行われていたことが明らかとなっている。今回の発掘調査では、第10地点において弥生時代中期の土器片が出土したが、他の地点では土器が伴わず、時期比定に至っていない。

第6次調査にて採集・出土した石器には、石斧では蛤刃石斧、打製石斧、小型石斧、扁平石斧、楔形石斧があり、その他に石鎌未製品、叩石がある。総数528点で、素材は点数に含まない。

石斧未製品は、長さが10cm未満から23cm大を測り、幅や厚さに様々な形状を持っているが、それは原石の選び方に拘っていると考えられる。第3・8次調査においても指摘されているように、求める石斧の大きさに適った転轍を用いて、粗削：打裂調整を行い成形するもの、縁辺の打裂細部調整にて成形するもの、いきなり敲打のみにて成形した石斧未製品も出土している。原材料は、第3・8次調査では、今山の東側の海岸転轍を材料としているが、第6次調査、第3地点では原材料に風化円錐を、第5地点では柱状玄武岩の母岩から切り出した板状削石もしくは転轍を、第10地点では玄武岩柱状節理が倒壊した角柱礫もしくは角礫を原石としている。よって原材料の違いは、多量に出土したチップ・フレイクにも見られ、第5・10地点では、縁辺のしっかりしたチップ、フレイクがほとんどであるのに対し、第3地点では、縁辺部が風化・破損したものの多い。第3地点では風化円錐を半裁、もしくは数等分割（割石）することで素材を作り出し、その素材を余すことなく用いることから石斧の長さ、幅、厚さが左右され、長さ15cm前後の小型品から30cm大の大型品まであり、企画性がない。片面に自然面を残した刃材は、縁辺に打裂調整を加えることで成形しており、扁平な石斧未製品も多い。素材に大きな心材を用いた長さと厚みのある大型石斧未製品には、粗削：打裂調整を経るものもあるが、全体に素材作りから敲打段階までの規則性は見られない。西側山麓の第10地点では、未製品の多くが角錐を原石として用い、数等分に分割して素材としているため長さが23cm前後に規格化された石斧未製品が多い。ここでも大きな割石（素材）は、粗削段階を経るが、石斧の長さ、厚さに適った素材であれば、打裂調整を片面もしくは両面の一部に加えて成形している。

石斧の製作は、中山平次郎博士によって4段階の工程が考えられたが、第3次調査においては、石材に石斧の大きさに近い「自然転轍」を用いるため、Ⅰ工程：粗削とⅡ工程打裂調整が連続した作業として一つの工程に纏められると分析している。石斧の製作工程は、用いる素材によって工程に違いが生じるようで、簡略した工程も同時に行われていたのであろう。従来の石斧製作工程に加えて素材作り（割石）の段階も考えて良いと思われる。研磨工程は、第8次調査にて研磨作業が行われた石斧未製品が出土しているが、今回の調査では一点も出土しておらず、製作作業場の占地もしくは作業集団によるものか、今後の課題である。

発掘調査によって膨大な石斧未製品や素材が出土したが、時間的な制約もあって実測や分析が不十分であることは否めない。今後も継続的な整理分析を行い、今山遺跡の実態に迫りたいと考えている。発掘調査から整理作業に携わっていただいた地元の方々を含めた関係者の皆様に感謝の意を表するものである。

Tab 1 今山遺跡調査一覧

道跡名	調査番号	旧称	地点名	所在地	調査期間	事業内容	調査者・主務者	報告書	参考
今山道跡	-		第1地点	今山熊野神社 現境	大正12年 (1923)	調査	中山平次郎	「今山の石斧製造所址」福岡県 史蹟名勝天然記念物報告6、福 岡市教育委員会1931	
今山道跡	-		第2地点	今山薬園南部底 藍標設置地点	大正12年 (1923)	調査	中山平次郎		
今山道跡1次	6802		第3・4道跡		S43-12-6～ 12-8(1968)	根掘調査	福岡市教育委 員会	「今山道跡(1)」福岡市報告第 22集1973	
今山道跡2次	7301				S47-3-3 (1974)		福岡市教育委 員会		
今山道跡3次	7602		42-43地点		S51-7～8-	玉前白松幸道跡	福岡市教育委 員会	「今山・今宿道跡」福岡市報告 第75集1981	
今山道跡4次	7722				S52-7-26～ 7-29	専用住宅	福岡市教育委 員会		
今山道跡5次	7952		第5・6地点	西区今宿横浜二 丁目地内	S54-4-28～ 5-5(1979)	根掘調査	浜田昌治	「今山道跡5・6地点を発掘調査 を終えて、福岡考古学会会報 第10号1979」	
今山道跡6次	8409		第1～11地点		S59-10-8～ 11-30	根掘調査	福岡市教育委 員会		
今山道跡7次	9622			西区今宿横浜二 丁目地内	1996-7-25～29	下水道工事	福岡市教育委 員会	「今山道跡第7次調査」福岡 市報告第53号1996	
今山道跡8次				西区今宿横浜二 丁目地内	1999-5-1～ 2000-3-9	志摩線道路拡 幅工事	福岡市教育委 員会	「今山道跡第8次調査」福岡 市報告第53号2005	

報告書抄録

ふりがな	いまやまいせきだいろくじ						
書名	今山道跡第6次調査						
副書名	重要道路の確認調査						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1254集						
編著者名	井澤洋一						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-0001 福岡市中央区天神1-8						
発行年月日	2015年3月25日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積m ²	発掘原因
ひいまやまいせき 今山道跡	ふくおかさんぶくおかし 福岡県福岡市 にじこまこま 西区横浜二丁目	40132	0620	33°58'94"	130°26'27" ～ 19841130	19841008 340	範囲確認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
今山道跡	集落	弥生時代～古墳時代	弥生時代石器製作跡	玄武岩石斧未製品	石斧工房が確認できたこと		
要約	旧石器時代から近世までの遺物が出土した。発掘調査は、主として今山西側地域において弥生時代の大型 刀型石器の製作跡、及び分布状態の確認を目的とし、三ヶ所の石斧製作跡を確認した。						



事前調査の状況

今山遺跡第6次調査
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1254集

2015年(平成27年)3月25日

編集・発行 福岡市教育委員会

〒810-0001 福岡市中央区天神1丁目8-1

電話 (092) 711-4667

印 刷 國崎美峰堂

〒812-0053 福岡市東区箱崎1丁目20-5

電話 (092) 641-8822